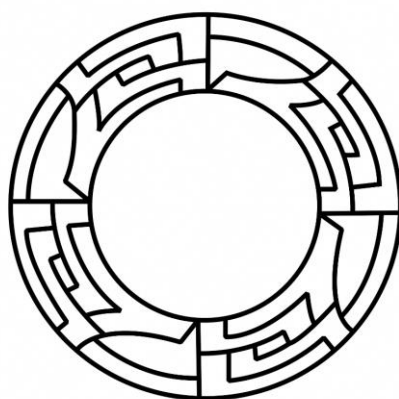


岸和田市文化賞

第 36 回
濱田青陵賞授賞式

日 時 令和 6 年 9 月 22 日（日・祝）午後 1 時
場 所 岸和田市立文化会館（マドカホール）



岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

第 36 回 濱田青陵賞授賞式次第

◇ 表 彰

表彰状・副賞 岸和田市長 永野 耕平

副 賞 朝日新聞編集局長 龍沢 正之

◇ 祝 辞 岸和田市議会議長 烏野 隆生

◇ 選考経過及び受賞者紹介

濱田青陵賞選考委員長 小林 達雄

◇ 受賞者記念講演

東京大学大学院人文社会系研究科准教授 森先 一貴

受賞理由 日本旧石器時代の体系的研究とその社会的・国際的発信

記念講演 考古学からみた日本列島における現生人類文化のはじまり

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

◇ 記念シンポジウム

「日本人はどこから来たか」

パネリスト（順不同・敬称省略）

東京大学大学院人文社会系研究科准教授 森先 一貴

沖縄県教育庁文化財課主幹 片桐 千亜紀

慶應義塾大学文学部教授 河野 礼子

コメンテーター

國學院大學名誉教授 小林 達雄

司 会 中村 俊介

朝日新聞編集委員

【 箏演奏 】 岡部 雅浪（おかべ まさなみ） 正派大師範

1974 年、正派音楽院音楽科を卒業し、唯是震一氏の門下生となる。75 年、NHK 邦楽育成会卒業。80 年、山田五十鈴主演「しぐれ茶屋おりく」に箏演奏出演。90 年には雅浪会を結成する。91 年、NHK オーディション合格。

05 年には人間国宝 鶴澤友路師と共演するなど、多方面で活躍する。濱田青陵賞では、第 5 回（1992 年）より箏演奏を手掛け、“音楽が司会者”という濱田青陵賞の伝統となっている。

【本日の箏曲名】 「泉」 作曲 宮城道雄

ご あ い さ つ

「岸和田市文化賞条例」に基づき 1988 年に制定されました「濱田青陵賞」は、考古学とその周辺諸科学の分野で活躍中の研究者を対象とする文化賞です。このたび第 36 回目を迎え、東京大学大学院人文社会系研究科准教授 森先一貴氏の研究業績に対し贈られることになりました。

ここに授賞のご報告をさせていただくと共に、皆様のご理解と、学界関係各位の多大なるご協力に対し深く感謝申し上げ、本賞が、さらなる学術文化の振興に貢献できるものとなることを祈りつつごあいさついたします。

令和 6 年 9 月 22 日

岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

【濱田青陵賞】

濱田青陵賞は、岸和田市にゆかりが深く、我が国考古学の先駆者として偉大な功績を残され、多くの後進を育成された濱田耕作（号 青陵）博士没後 50 年にあたる 1988 年に岸和田市と朝日新聞社が創設しました。

市民の誇りとして博士の業績を称えるとともに、我が国考古学の振興に寄与する目的で、業績のあった新進の研究者や団体を広く選考し表彰するものです。

受賞者には岸和田市より表彰状と副賞、記念盾が、朝日新聞社より副賞が贈られます。



濱田青陵賞受賞者

回 数	氏 名	業 績	受賞当時の所属/職
第1回(1988年)	東 野 治 之	アジアの視点にたつ古代日本文化の研究	大阪大学教養部助教授
第2回(1989年)	都出比呂志	日本農耕社会の成立過程に関する研究	大阪大学文学部教授
第3回(1990年)	小 林 達 雄	縄文文化の総合的研究	國學院大學文学部教授
第4回(1991年)	青 柳 正 規	古代ローマの美術・考古学研究におけるすぐれた業績	東京大学文学部教授
第5回(1992年)	田 中 淡	中国建築史の研究	京都大学人文科学研究所助教授
第6回(1993年)	春 成 秀 爾	原始時代の社会構造とイデオロギーに関する考古学的研究	国立歴史民俗博物館教授
第7回(1994年)	千 田 稔	古代日本の歴史地理学的研究について	奈良女子大学文学部教授
第8回(1995年)	武田佐知子	服装史と日本古代国家の形成についての研究	大阪外国語大学助教授
第9回(1996年)	山 中 敏 史	古代官衙に関する考古学的研究	奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長
第10回(1997度)	菊 池 俊 彦	北の海と大地を視点として	北海道大学文学部教授
第11回(1998年)	甲 元 眞之	東アジア新石器時代社会研究の革新	熊本大学文学部教授
第12回(1999年)	上 原 真 人	瓦と木器から日本の古代を追求する	京都大学大学院教授
第13回(2000年)	岡 村 秀 典	中国・日本の考古学を連携する研究	京都大学人文科学研究所助教授
第14回(2001年)	今 村 啓 爾	縄文文化を中心とした考古学の実証的研究と日本考古学の英文概説書による海外への紹介	東京大学大学院教授
第15回(2002年)	寺 沢 薫	考古学的成果にもとづく王権・国家形成期のすぐれた研究	奈良県教育委員会文化財保存課
第16回(2003年)	宮 本 一 夫	東北アジア文化論とその日本文化への影響の研究	九州大学大学院教授
第17回(2004年)	佐藤洋一郎	DNAを使った新しい考古学の開拓	総合地球環境学研究所教授
第18回(2005年)	中村慎一	アジア稲作の起源と展開・中国文明の成立をめぐる比較研究	金沢大学文学部助教授
第19回(2006年)	福永伸哉	三角縁神獣鏡と国家形成の研究	大阪大学大学院文学研究科教授
第20回(2007年)	難波洋三	銅鐸の研究	京都国立博物館学芸課情報管理室室長
第21回(2008年)	関 雄 二	古代アンデス文明の形成過程とその特質に関する研究	国立民族学博物館教授・先端人類科学研究部長
第22回(2009年)	村 上 恭 通	東アジアにおける鉄と国家形成過程との有機的関係を解明した	愛媛大学教授・東アジア古代鉄器文化研究センター長
第23回(2010年)	若 狭 徹	古墳時代地域首長とその支配領域の形成過程に関する実証的研究	高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係長
第24回(2011年)	松 井 章	日本考古学における動物、環境考古学の確立と国際化	国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
第25回(2012年)	小 畑 弘 己	東北アジアにおける穀物栽培過程の革新的研究	熊本大学文学部教授
第26回(2013年)	市 大 樹	考古学と木簡などの研究を重ね、古代国家の研究を大きく前進させた	大阪大学大学院文学研究科准教授
第27回(2014年)	吉 井 秀 夫	百済を中心とする朝鮮半島墳墓の研究と古代日朝関係史、朝鮮考古学の研究を進めた	京都大学大学院教授
第28回(2015年)	千 田 嘉 博	城郭の考古学的研究を新たに開拓し、その確立と発展に寄与	奈良大学学長
第29回(2016年)	下 垣 仁 志	古墳時代の王権構造の解明に大きく寄与した	京都大学准教授
第30回(2017年)	外 村 中	東洋古代の芸術文化の解明に大きく寄与した	ドイツ ヴェルツブルク大学 東方文化研究所漢学系上級講師

第31回（2018年）	関根 達人	独自の視点と方法により考古学が中世史・近世史に大きく貢献しうることを示した。	弘前大学文学部教授
第32回（2019年）	米 田 穰	同位体分析をもちいた考古科学を開拓し、その確立と発展に寄与した	東京大学総合研究博物館教授
第33回（2021年）	河上麻由子	仏教文化の視点による古代東アジアの対外交渉史の研究	大阪大学大学院文学研究科 東洋史学研究室准教授
第34回（2022年）	堀 大 介	考古学に立脚した古代地域史像及び白山信仰史の学際的研究	佛教大学歴史学部歴史文化学科教授
第35回（2023年）	辻田 淳一郎	古代鏡の分析による古墳時代を中心とした考古学的研究	九州大学大学院人文科学研究院 准教授

「考古学は過去人類の物質的遺物に抛り人類の過去を研究する学」

濱田耕作『通論考古学』

濱田青陵

本名、濱田耕作。1881～1938年。東京帝国大学文学部（美術史）卒。卒業論文は「希臘的美術の東漸を論ず」。イギリスなど3年間のヨーロッパ留学の後、京都帝国大学に日本初の考古学教室を開き、近代的かつ科学的な日本考古学を教えた。国内はもちろん中国、朝鮮での発掘調査も指導・踏査を行い、さらに美術史、建築史、民俗学などにも活動の領域を広げて総合的な学風を樹立した。

また、精巧な模写、俳画に似た洒落たスケッチや旅行記、絶妙な味わいの随筆をたしなみ、温厚な人柄でも知られた。

著書に『通論考古学』、『東洋美術史研究』、『考古学研究』、『百済観音』、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』など多数の著書がある。

旧岸和田藩士の父、濱田源十郎氏は、警察官などを経て、朝日新聞社の初代会計課長。また元岸和田藩主岡部長職の三男長挙氏は、朝日新聞創業家の村山家に婿入りしており、村山長挙としてのちに朝日新聞社主となる。長挙自身、京都大学の学生時代に濱田耕作宅に下宿しており、まだ濱田耕作も大学卒業後の一時期、朝日新聞社の美術誌『国華』の執筆、編集者となったことがある。



第 36 回 濱田青陵賞受賞者

受賞者氏名

森先一貴（もりさき かずき）

東京大学大学院人文社会系研究科准教授

博士（環境学）



経 歴

- 1979 年 京都府生まれ（45 歳）
- 2002 年 大阪大学文学部人文学科卒業
- 2009 年 東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻博士課程 修了 博士（環境学）取得
- 2009 年 奈良文化財研究所研究員（～2015）
- 2015 年 文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門 文化財調査官（～2020）
- 2022 年 東京大学大学院人文社会系研究科
- 2020 年 国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員
- 2020 年 国立文化財機構文化財防災センター 併任
基礎文化研究専攻考古学専門分野准教授
- 2022 年 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

主な論著

- ・『旧石器社会の人類生態学』（同成社 2022）
- ・『日本列島四万年のディープヒストリー—先史考古学から見た現代』（朝日新聞出版 2021）
- ・『境界の日本史—日本列島の地域性はどう生まれたか』（共著 朝日新聞出版 2019）
- ・『旧石器社会の構造的変化と地域適応』（六一書房 2010）
- ・‘Early Upper Palaeolithic blade technology in the Japanese Archipelago’,
Archaeological Research in Asia, Volume 17, ELSEVIER, 2019（佐野勝宏らと共著）
- ・‘Sedentism, pottery and inland fishing in Late Glacial Japan: a reassessment of the
Maedakochi site’, Antiquity, Volume 93, 2019（佐藤宏之らと共著）
- ・Lithics and climate: technological responses to landscape change in Upper Palaeolithic northern
Japan, Antiquity, Volume 89, 2015（佐藤宏之らと共著）

【受賞理由】

「日本旧石器時代の体系的研究とその社会的・国際的発信」

第36回濱田青陵賞選考委員会は、2024年（令和6年）5月28日に開催され、厳正な審査の結果、東京大学大学院人文社会系研究科准教授の森先一貴氏に決定した。

森先一貴氏は、2002年に大阪大学文学部人文学科を卒業後、東京大学大学院新領域創成科学研究科に進学。2009年に同博士後期課程を修了し、博士（環境学）の学位を取得した。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員、文化庁文化財調査官などを経て、2022年に東京大学大学院人文社会系研究科に准教授として着任し、現在に至る。

森先氏の中心的研究領域は日本列島の旧石器時代から縄文時代草創期にかけての人類活動に焦点を当てた先史考古学である。列島の旧石器時代を東アジア世界の中でとらえる視野の広さ、世界の先史考古学の成果に照らしてその人類史レベルでの位置づけを展望するスケールの大きさ、石器の型式研究と高精度年代測定により考古編年を再構築し、古気候・古環境研究と接続して「人類生態系」という新たな切り口から列島人類史を論じ直す学際的アプローチなどが研究の大きな特徴であり、高く評価できる点である。

その成果は『旧石器社会の構造的変化と地域適応』（2010年、六一書房）、『旧石器社会の人類生態学』（2022年、同成社）などの専門書で学界に問うだけでなく、『境界の日本史』（共著、2019年、朝日選書）、『日本列島四万年のディープヒストリー 先史考古学からみた現代』（2021年、朝日選書）などの一般書においても、地域論、文化論の興味深い叙述として活かされている。

『旧石器社会の構造的変化と地域適応』においては、本州から九州まで広域にわたって悉皆的に考古資料を集成し、丹念な編年研究に基づいて、列島各地に環境変化に応じて個性的な適応形態をもつ多様性豊かな社会が成立していく過程を体系的に論じた。

『旧石器社会の人類生態学』では、分析対象を北海道から南西諸島に広げるとともに、東アジア全域も議論の射程に入れて列島旧石器時代の研究を深化させる。石器資料の広域研究を基礎に、気候学、地質学、植物学、動物学など第四紀学の成果を積極的に取り入れて、かつては等質的と評価された当該期の列島文化に、実は地域環境に対応した多彩な地域差が芽生えていたこと、その背景に列島の後期旧石器時代初期に起きた複数回の人類移住があったことを論じ、列島内への人類の拡散と定着に関するダイナミックな学説を提起した。また、こうして成立した旧石器時代社会が変容を遂げながら縄文時代に移行していくプロセスについても研究を深め、縄文時代の始まりは地域ごとに個性的であって、土器出現、定住開始、文化伝播といった一元的な説明を拒む複雑さを持

つことを指摘し、この複雑さこそが列島先史文化の顕著な特徴であるとの見通しを示している。

現生人類の拡散と適応の歴史は、日本列島にとどまらない国際的な研究関心でもある。森先氏は、北日本の石器組成と人類行動戦略の関係や東京都前田耕地遺跡の資料分析に基づく人類定住化のプロセスなど、列島出土資料を駆使して導き出した成果を、著名な国際誌『Antiquity』をはじめ複数の海外誌に発表するなど、世界への研究発信にも意欲的に取り組んでいる。さらに、文化庁において文化財保護行政に携わった経験を活かし、埋蔵文化財による地域の魅力発信への貢献を企図した一般書や、考古学的視点から現代社会の諸問題・諸課題を照らす著書を上梓するなど、つねに社会との関わりを意識した研究を進めていることも特筆される。

このように、旧石器時代を主たる研究対象としながらも、隣接諸分野の成果を統合して広く人類史的な視点から魅力的な成果を上げている森先氏は、今後の日本考古学をリードする優れた研究者と評価できる。よって、第36回濱田青陵賞受賞者として選考するものである。

第36回濱田青陵賞選考委員長 小林 達雄

第36回 濱田青陵賞選考委員会委員（順不同）

委員長	小林達雄	國學院大學名誉教授
委員	和田晴吾	立命館大学名誉教授
委員	東野治之	奈良大学名誉教授
委員	中村慎一	金沢大学副学長
委員	福永伸哉	大阪大学人文科学研究科教授
委員	森岡秀人	古代学協会客員研究員

森先一貴氏記念講演要旨

考古学からみた日本列島における現生人類文化のはじまり

東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 森先一貴

1. はじめに ―現生人類の拡散と日本列島―

現生人類 (*Homo sapiens*) は約 30～20 万年前のアフリカに起源する。およそ 5 万年前以降にユーラシアに進出し、現生人類に先立って各地に存在した先行人類種にやがて入れ替わるように生息域を広げ、やがて南極を除くすべての大陸に定着した (図 1)。ユーラシア西部から東部にいたるルートには、中央アジアからシベリア南部経由と南アジア・東南アジア経由の二大ルートが考えられている (海部 2005)。東アジアの現生人類集団がどちらのルートを経由してやってきたのかという問いは、日本列島の人類史の幕開けを理解する上でも重要である。近年では遺伝学的研究が進んだことにより、東アジアにおける現生人類集団の形成には南ルートの移住が大きく寄与していたことが考えられている (太田 2023)。まだ確定的な学説とはいえないのが現状で、この分野の研究はさらに今後の展開に注目していかなければいけないのだが、考古学研究上の問いを發するうえでも有益な情報を多く含んでいる。

それでは、考古学的にみた場合、すなわち人類が使用した道具や活動痕跡などの証拠からみて現生人類がいつどこから最初に列島に移住してきたのかを知ることができるだろうか。本講演ではこの点について考えてみたい。なお、以下の議論の主な研究対象は石器である。これは、日本列島に人類の化石資料が著しく少ないためである (ただし、大陸の資料を含め、現状の人類化石から様々なことがわかる。河野氏の報告を参照)。

2. 陸橋の有無と人類移住

日本列島への人類移住を考えるには、大陸と地続きだったかどうかに関心に向けられる。日本列島が今日の姿となったのは完新世以降である。更新世には、氷期―間氷期サイクルと海水準変動をうけて、日本列島の陸域の状況や列島周囲の海峡の幅はさまざまに変化した (図 2)。とくに、大陸との玄関口となる朝鮮・対馬海峡が開いていたかどうかは、人類の移住を知る上でも欠かせない情報である。ただ、海峡の有無を厳密に知ることは、じつは簡単ではないようである。海水面の上下変動だけでなく、海水自体の重さが地殻に荷重をかけることで、陸海の状況は複雑に変動するためだ。したがって、たとえば特徴的な動物群がこの海峡部をとって大陸から列島に移住したかどうかといった間接的証拠も重要になる。

古生物学では、約 63 万年前の氷期（海洋酸素同位体（P17-①）ステージ 16、非常に寒冷な時期で海面が下がっている）、約 43 万年前の氷期（海洋酸素同位体ステージ 12、同上）に、トウヨウゾウやナウマンゾウが西方ルートで列島に分布を広げたといわれている。このことも間接的証拠として、朝鮮・対馬海峡およびその周囲に広大な陸橋が存在したと考えられている（Yoshikawa et al. 2007）。ただし、この時期に日本列島では多く研究者がみとめる確実な人類活動痕跡はみつかっていない。

一方、上記動物群の移住以降、この海峡には陸橋が形成された明確な証拠がない。約 15～14 万年前の亜氷期（海洋酸素同位体ステージ 6）にも陸橋の存在が推定されることもある（Nakazawa and Bae 2018）が、決定的な証拠はない。この時に、島根県砂原遺跡や岩手県金取遺跡・柏山館跡を残すような人類の移住があったとする研究もある（松藤 2014、佐藤 2016、長井 2021）。今後とも大いに議論すべき仮説とは思いますが、これらの遺跡や遺物が人類活動によって残されたとするさらなる証拠を求める声が多いことも確かである。少なくとも、議論の俎上に上がる遺跡の少なさからみても、この時期に大規模な移住があったとする証拠はない。移住してきた人類がいたとしても、十分に世代をつなぐことができたかどうかは疑わしい。

これ以降でもっとも寒冷であったのは約 3～1.9 万年前である。この時期を最終氷期最寒冷期といい、大きく海水準が低下した（横山 2002、Yokoyama et al. 2018）。ただし、朝鮮・対馬海峡周辺に顕著な地殻変動がなかったことをふまえると、さきほどの荷重の問題（海水性アイソスタシー）を考えても最大で -120 ± 7 m の海水準の低下があったと考えられ、この試算では狭い海峡自体は存在したと考えられている（Oba and Irino 2012）。基本的には、海洋酸素同位体ステージ 12 以降は陸続きになったことはなかったようである。

さて、人類が日本列島に到達したことを示す、地質編年上もたしかな遺跡の年代は、もっとも古いもので約 3.9～3.7 万年前、熊本県の遺跡で知られている。この後に列島内に遺跡が急増することから考えても、列島への主要な人類移住タイミングはこの時とみてよい。このときも、いまより -70 m 程度は海水準が低下していた。現在の平均水深が -40 m ほどしかない瀬戸内海は陸地化していたため、本州・四国・九州は一体化し、「古本州島」という単一の大きな島を形成していた（図 2）。北海道はというと、サハリン島と接続して大陸からのびる半島、「古北海道半島」の一部となっていた。琉球列島はいくつかの島が合体することもあったが、依然として「古琉球列島」をなした。

最初に現生人類が日本列島に移住したのは、古本州島であった。このとき、朝鮮・対馬海峡の幅は、最終氷期最寒冷期に海水準が -120 m 低下したときよりも広がった。つまり、海峡幅と人類移住のタイミングに、単純な関係があるわけではなさそうである。これに僅かに遅れて、古琉球列島への人の移住もあったことが知られている。南ルート移住の議論については片桐氏の報告を参照していただき、以下では古本州島、古北海道半

島の考古学的証拠を紹介する。

3. 日本列島人類史の開始に関するモデル

かつて、後期旧石器時代の前半（筆者は後期旧石器時代前葉と呼んでいる）にあたる約4～3万年前には、それ以前の「中期旧石器時代」の流れを汲んだ「台形様石器＝剥片石器」に（P17-②）、新たに「大陸からの伝播」か「列島内での技術開発」により生まれた「石刃尖頭器（かつては「ナイフ形石器」）＝石刃石器（P17-③）」が加わったシンプルな生活道具が用いられたとされた。この二つの道具の組み合わせは「二極構造」（佐藤 1992）と名付けられ、列島に広く特徴づけるとされた（図3）。つまり、人類文化の地域性ははっきりしないとされたのである。ところが、2000年代以降に新たに蓄積した証拠にもとづく研究の進展によって、現在ではこのモデルとはかなり異なる状況が明らかになった（森先 2022・2023）。

2000年11月、前・中期旧石器時代遺跡捏造問題が発覚し、多くの研究対象資料が学術資料とは認められなくなり棄却された。このことによって、上記のモデルのうち「中期旧石器時代」の流れを汲むとされた台形様石器の系統は見直されなければならないはずであった。しかし、捏造問題に関係しないいくつかの遺跡を根拠に、このモデル（A）を維持しようとする意見がある一方で存続している他方で、捏造問題発覚以降は後期旧石器時代より古い遺跡は現状で認められないとして、関東地方の立川ロームX層（P17-④）の現生人類文化がもっとも古いと考えるモデル（B）もある（諏訪間 2019 など）。本来は、根拠とされる捏造非関与の遺跡自体を直接検証する必要があるはずだが、まだ体系的には行われていない。今後過去の資料を現代的方法であらためて検証し、新たな証拠を積み上げることで答えを出すことが求められる。ただしそれが未達成の現状でも、次に述べる新しい事実からは先の二つのモデルをそのまま認めることはできそうにない。

台形様石器が出土した、古本州島で確実な最古の年代を示す遺跡の一つが、熊本県石の本遺跡群8区石器群である。石核の周囲を巡るように、石器の素材となる剥片を剥がす「求心状リダクション（P17-⑤）」を含む様々な剥片剥離技術が特徴だが、小型縦長剥片を作る技術もある。あまり定型化しない柔軟な技術に特徴をっており、台形様石器や鋸歯縁削器、ピックと呼ばれる尖頭部を持つ石器などを製作する（図4下）。年代値は39,000～36,700年前（cal BP（2 σ ）、IntCal20、以下同）、確率分布の中央値で38,200～37,200年前である（森先他 2020）。ほぼ同時期の年代を持つ遺跡はほかにも静岡県の井手丸山遺跡がある。

まず重要なことは、この確実な人類活動痕跡は、上記Bの意見にある立川ロームX層の年代よりも古いことである。代表的な遺跡である東京都武蔵台遺跡の年代研究（尾田・森先他 2024）で筆者らは、立川ロームX層が36,700～35,500年前であることを確か

めている。この時点で、モデルBは成り立たない。また、これは単に年代がさかのぼったことだけを意味するのではない。すでに過去に発見されていた石刃石器（図4上）の年代観を今日的に再検討すれば、37,000～35,500年前となるため（Morisaki et al. 2019）、日本列島（古本州島）には最初に剥片石器群、遅れて石刃石器群が現れたことになるからである。しかも、その石刃石器群ははじめ、中部高地や関東など、列島の一部地域にのみ分布がみられる。剥片石器と石刃石器を併せ持つ均質な「二極構造」がひろがる状況は認められず、道具立てにもかなりの地域差があることもわかっている。

こうしたことはモデルAに不利である。またこのモデルの根拠となる捏造「非関与」の中期旧石器候補遺跡には、現代の研究水準からみて年代決定に再検討の余地が多分にある。さらに、それらは技術的にみても求心状リダクションに特徴を持ち、実は石の本遺跡群8区の資料と同時代の石器群である可能性さえある。ならば石の本遺跡群8区も中期旧石器なのでは、という反対意見もあろう。しかし、石の本遺跡群8区の黒曜石利用は100km近い遠隔地産を含み、その後の九州地方で見られる石材利用の初源的特徴を持つこと、またその後の後期旧石器時代前葉を代表する台形様石器をもつことから、この石器群の時期をその直後と切り離す合理的理由はないのである。モデルAもかなり旗色が悪いと言わざるを得ない。

4. 古本州島の現生人類はどこから？

こうしたことから、筆者らは日本列島旧石器時代の人類史は「基本的には」現生人類文化である後期旧石器時代にはじまるとみるが、その実態はかつて思われていたより複雑であることを示すモデルを新たに提案している。たとえば、石刃石器は大陸伝播か列島内自生かという単純な二者択一的モデルで説明が試みられた。しかし、上記のことをふまえば、古本州島の後期旧石器時代の成立には大陸側からの移住・情報伝播、そして列島内での技術進化が複雑に関与していると考えられる（Morisaki et al. 2019, 2023）。

石器群の分布なども併せて考えると、現在のところ次のようになる。石の本遺跡群8区のような剥片石器群は、同時代に中国北部に広がっていた技術群が朝鮮半島南端から古本州島南半を中心に、同緯度東西に広がりを見せたものと考えられる（森先他 2020、森先 2023）。これに遅れて現れる石刃技術の特徴とする石器群は、朝鮮半島経由で直後の寒冷期に環日本海ルートに分布を広げた可能性がある（Morisaki et al. 2019、森先他 2020、森先 2022・2023）。また、年代の上では剥片石器群の初現は寒暖変動のうち温暖期にあたり、これに続いて出現する石刃石器群の最古の年代は、寒冷期に相当している。人類が朝鮮・対馬海峡をこえたタイミングに気候変動が関与している可能性を検討することも新しい課題となってきた（森先 2023）。

このように現生人類は最初、気候変動などとの関係のもと、複数回にわたって古本州

島（そして古琉球列島）に移住した。しかも、剥片石器群と石刃石器群は、出現時期と主な分布域を異にして日本列島内に定着したというかなり複雑な「多起源-多経路仮説」ともいうべきモデルが、今後の検証すべき一つの仮説となると考えている（図5・6）。

5. 古北海道半島ルート

古北海道半島の初期の人類文化はこれらとかなり異なっている。先述した最初期の剥片石器群の存在は、かつては想定されていたが、近年の年代研究では約3万年前ごろまでしかさかのぼらない（Izuho et al. 2018）。東北地方の34,000～32,000年前の石器群と類似した石器群が存在するので、その頃まで現生人類文化がさかのぼる可能性はあるものの（尾田・森先 2016）、現在では確証に至らない。少なくとも、古本州島のように古い時期から現生人類が繁栄していた状況を認めうる段階ではない。現生人類の初期移住ルートからは除外されると考えている。

むしろ、26,000年前に古本州島に先駆けて、シベリアなど北方世界で発達した細石刃石器群が出現することが知られている。この事実には現在でも変更はない。細石刃石器群が、シベリアからの人類移住でもたらされたか、北海道で生み出された技術であるかは、現在も議論の最中にある。

6. おわりに—日本列島後期旧石器文化のその後—

古本州島ではこの後、遺跡数の増減を繰り返しながらも、石刃技術・剥片技術・両面調整技術・細石刃技術など各種技術を利用しながら、人類の活動が継続することが知られている。

先ほど見てきた後期旧石器時代前葉（3.9～3.0万年前）には、石刃石器の発達が地域ごとに偏りがあるとともに、石刃製の尖頭器（槍先・ナイフ）に様々なタイプが現れ、多様な台形様石器、刃部磨製石斧の発達の程度などとあわせて地域ごとに多様化する。最終氷期最寒冷期に相当する後期旧石器時代中葉（3.0～1.9万年前）には、石刃・剥片を用いた地域個性的な槍先、加工具などの生活道具が創造され、いまの都道府県の範囲にも近い領域に多様な地域文化が生まれる。このとき、古北海道半島には細石刃石器群がいち早く導入される。後期旧石器時代後葉（1.9～1.6万年前）には細石刃石器群が、古琉球列島の大部分を除く日本列島全域を急速に席卷する。この急激な文化的な変化が、先立つ文化からの連続性で説明できるかどうかは、現代水準では検討された例がなく全く不明である。これからの研究課題ということになる。

筆者が取り組んでいるのは、遺跡数やその他の指標をもちいた人口動態である。日本列島には世界的に見ても群を抜いて高い密度で遺跡が見つまっている（1万箇所以上）。日本列島で高精度の編年を構築し、時期ごとの遺跡数の変動をみることは、各地

の人口の推移、繁栄や衰退をより詳しく明らかにすることにつながる。この変化は文化動態とともに理解することで、旧石器時代におこる様々な文化変化について、証拠に基づく社会的動態から説明が加えられる可能性が見えてきた。

例えば、後期旧石器時代前葉から中葉への移行時期（約 3 万年前）、同中葉から後葉への移行時期（約 1.9 万年前）には、そろって遺跡数が急減する時期が存在した可能性がある（森先 2022）。これらの時期に、他地域系統とみられる石器の出現や技術の変化（例えば剥片尖頭器の出現、国府石器群の広域展開、細石刃石器群の出現といった文化現象）が観察されることから、この際に生じた人口ボトルネックや人口流入、あるいは他地域とのネットワーク強化などが背景となって文化動態に急激な変化が起こった可能性があるのだ（Morisaki 2022）。これまで日本では、文化が連続的に変化することを素朴な前提とするか、逆に極端な移住モデルが提示されるかといった両極が認められたが、高精度年代測定技術などが普及した現在、従来とはまったく異なる新しい旧石器時代像が明らかになりつつある。

【引用文献】※講演要旨という性格上、引用は最小限。

太田博樹 2023 『古代ゲノムから見たサピエンス史』 吉川弘文館

尾田識好・森先一貴 2016 「秋田 10 遺跡の石器群と北海道後期旧石器時代前半期の諸問題」 『旧石器研究』 12、217-225 頁

尾田識好・森先一貴・岩瀬彬・國木田大・米田穰 2024 「武蔵台遺跡 X 層における人類の居住年代」 『第 22 回日本旧石器学会総会・研究発表・シンポジウム』、22-25 頁

海部陽介 2005 『人類がたどってきた道』 NHK 出版

佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』 柏書房

佐藤宏之 2016 「日本列島の中期/後期旧石器時代移行期に関する再検討」 『ラーフィダーン』 38、55-60 頁

諏訪間順 2019 『相模野台地の旧石器考古学』 新泉社

長井謙治 2021 「日本列島の中期・後期旧石器時代過渡期の石器技術一連鎖と剥離モードを検討する」 『旧石器研究』 17、15-40 頁

松藤和人 2014 『日本列島人類史の起源』 雄山閣

森先一貴・國木田大・池田朋生・長谷部善一・村崎孝宏 2020 「石の本再訪—日本列島後期旧石器時代の開始に関する研究—」 『旧石器研究』 16、43-58 頁

森先一貴 2022 『旧石器社会の人類生態学』 同成社

森先一貴 2023 「古本州島の台形様石器と石刃尖頭器」 『中・四国旧石器文化談話会 40 周年記念大会資料集』 中四国旧石器文化談話会、17-21 頁

横山祐典 2002 「最終氷期のグローバルな氷床量変動と人類の移動」 『地学雑誌』 111(6)、883-899 頁

- Izuho, M., Kunikita, D., Nakazawa, Y., Oda, N., Hiromatsu, K., Takahashi, O. 2018. New AMS Dates from the Shukubai-Kaso Site (Loc. Sankakuyama), Hokkaido (Japan): Refining the Chronology of Small Flake-Based Assemblages during the Early Upper Paleolithic in the Paleo-Sakhalin-Hokkaido-Kuril Peninsula. *PaleoAmerica*, 4(2): 134-150
- Morisaki, K. 2022. The middle and late Upper Palaeolithic in the Japanese archipelago: Local development and continental influence. *International Symposium Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology and Genetics*. Tohoku University, Sendai.
- Morisaki, K., Sano, K., M. Izuho 2019 Early Upper Paleolithic blade technology in the Japanese Archipelago. *Archaeological Research in Asia*, 17: 79-97
- Morisaki, K., Shiba, K. and Choi, D. 2023. Examining frequency and directionality of Palaeolithic sea-crossing over the Korea/Tsushima Strait: a synthesis. *World Archaeology*, 54(2): 162-186
- Nakazawa, Y., and C. J. Bae. 2018. Quaternary paleoenvironmental variation and its impact on initial human dispersals into the Japanese Archipelago. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, 512: 145-155.
- Oba, T & Irino, T. 2012 Sea level at the Last Glacial Maximum, constrained by oxygen isotopic curves of planktonic foraminifera in the Japan Sea. *Journal of Quaternary Science*, 27(9): 941-947.
- Yokoyama, Y., Esat, T.M., Thompson, W.G. et al. 2018. Rapid glaciation and a two-step sea level plunge into the Last Glacial Maximum. *Nature*, 559: 603-607
- Yoshikawa et al. 2007 Land bridge formation and proboscidean immigration into the Japanese Islands during the Quaternary. *Journal of Geosciences, Osaka City University*, 50(1): 1-6.

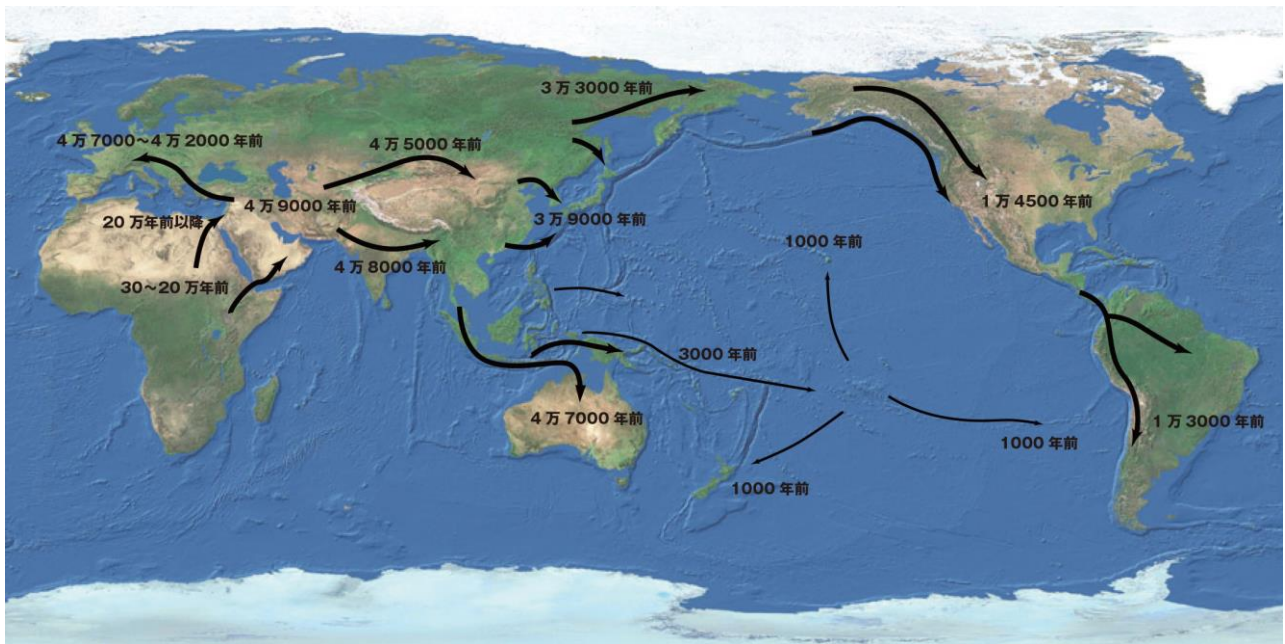


図1 現生人類の拡散

(森先一貴 2023 『日本列島四万年のディープヒストリー』 朝日新聞出版)

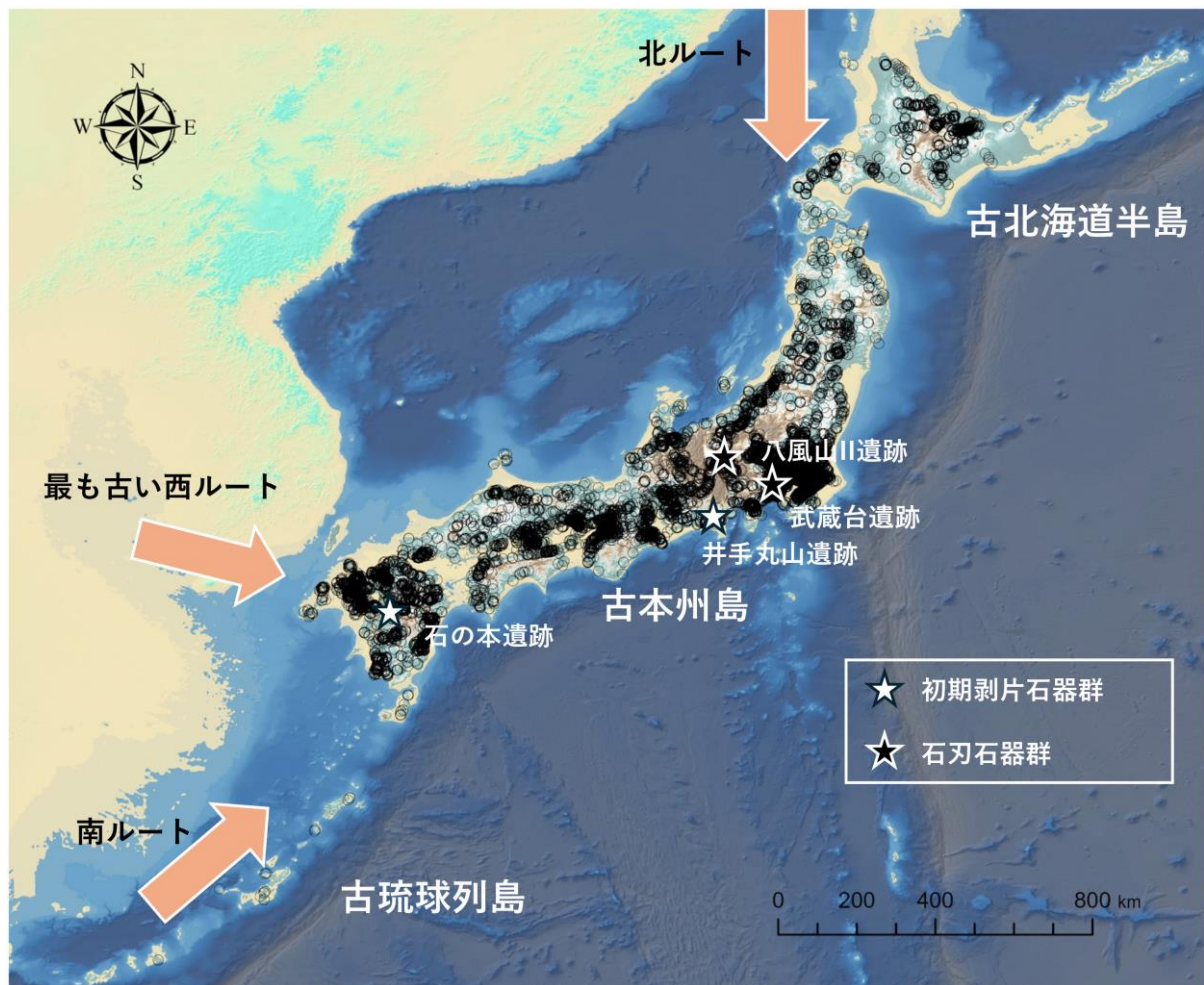


図2 3.9 万年前ごろの日本列島の状況と初期の遺跡

(ArcGIS3.2、GeoSuite 地形を用いて筆者作成 : ©Esri)

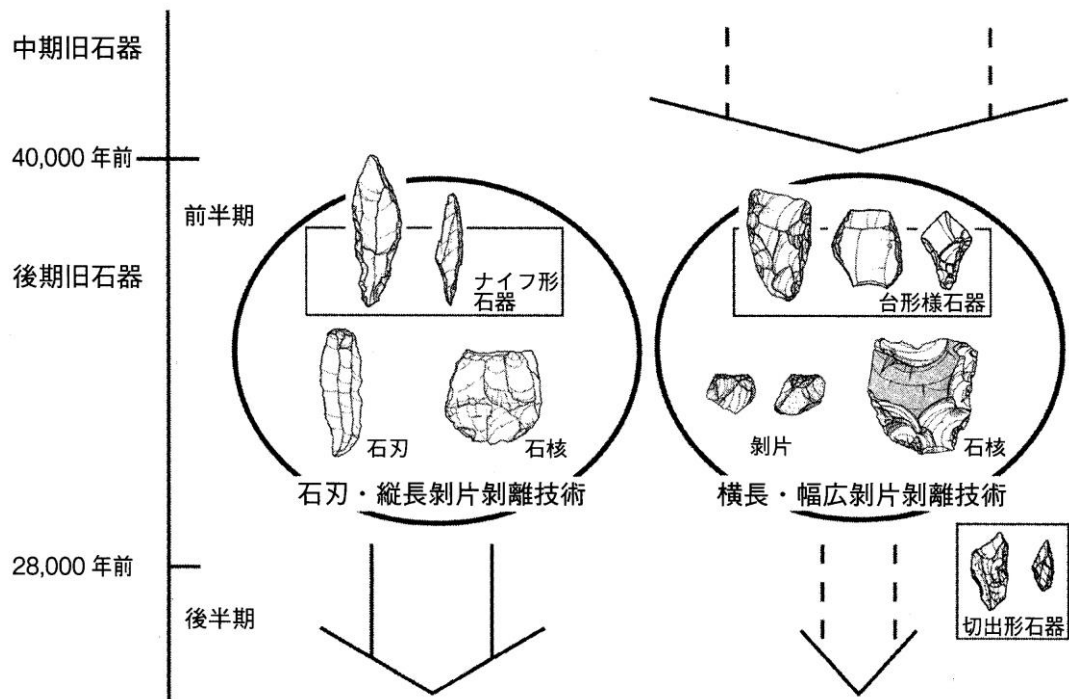


図3 「二極構造」

(佐藤宏之 2005「日本列島の自然史と人間」『日本の地誌 1 日本総論 (自然編)』朝倉書店)

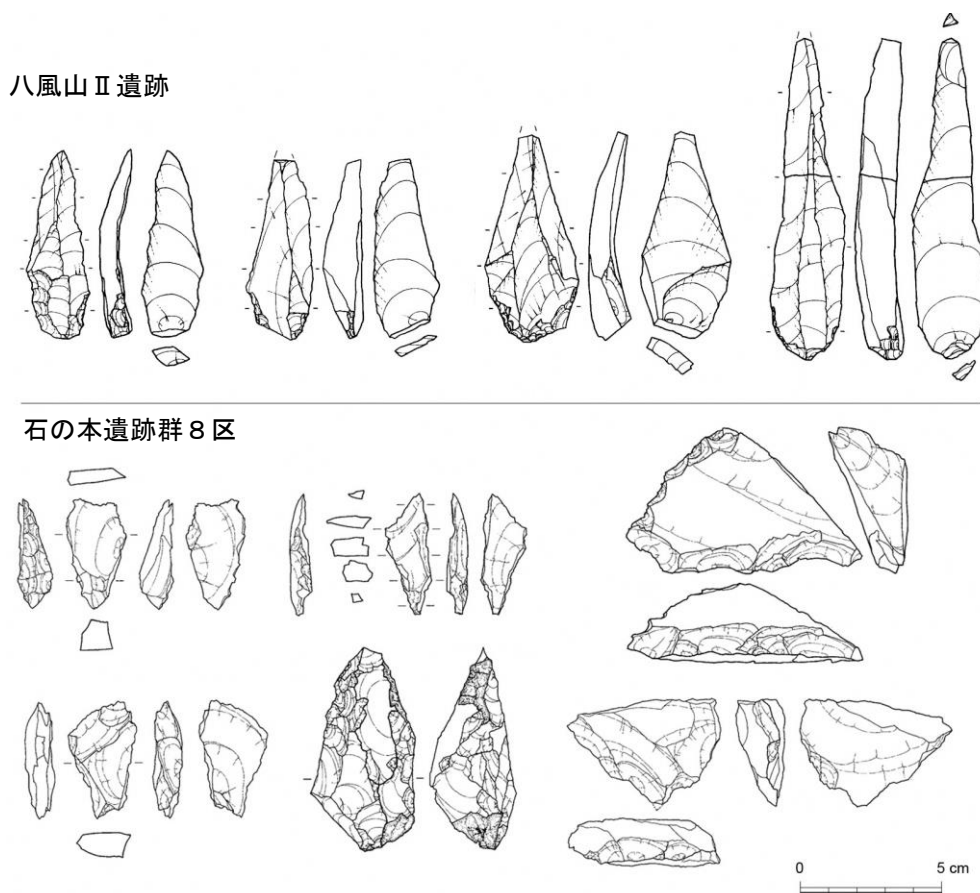


図4 後期旧石器時代初頭の剥片石器群 (下) と石刃石器群 (上)

(報告書より抜粋)

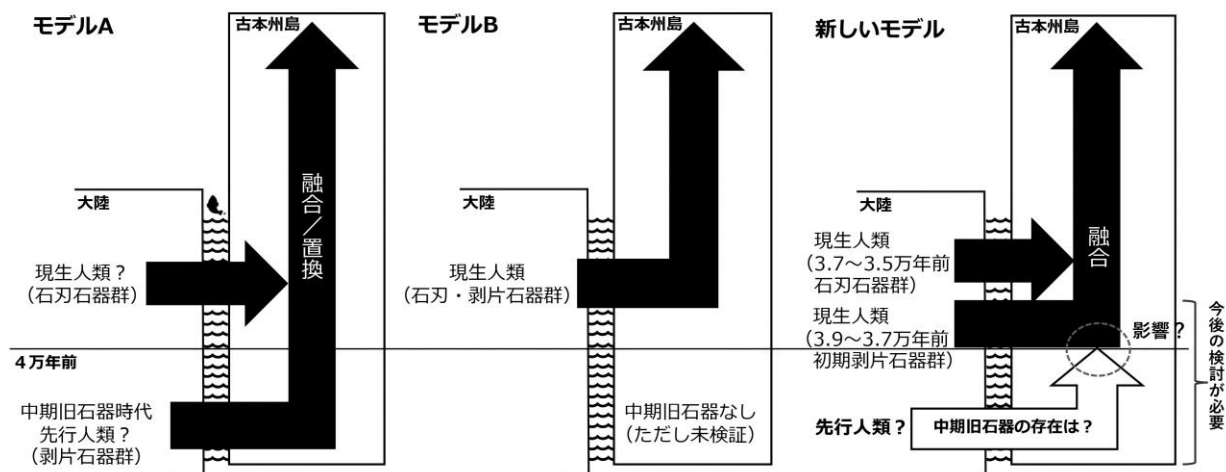


図5 後期旧石器時代の開始に関する新旧のモデル
(筆者作成)

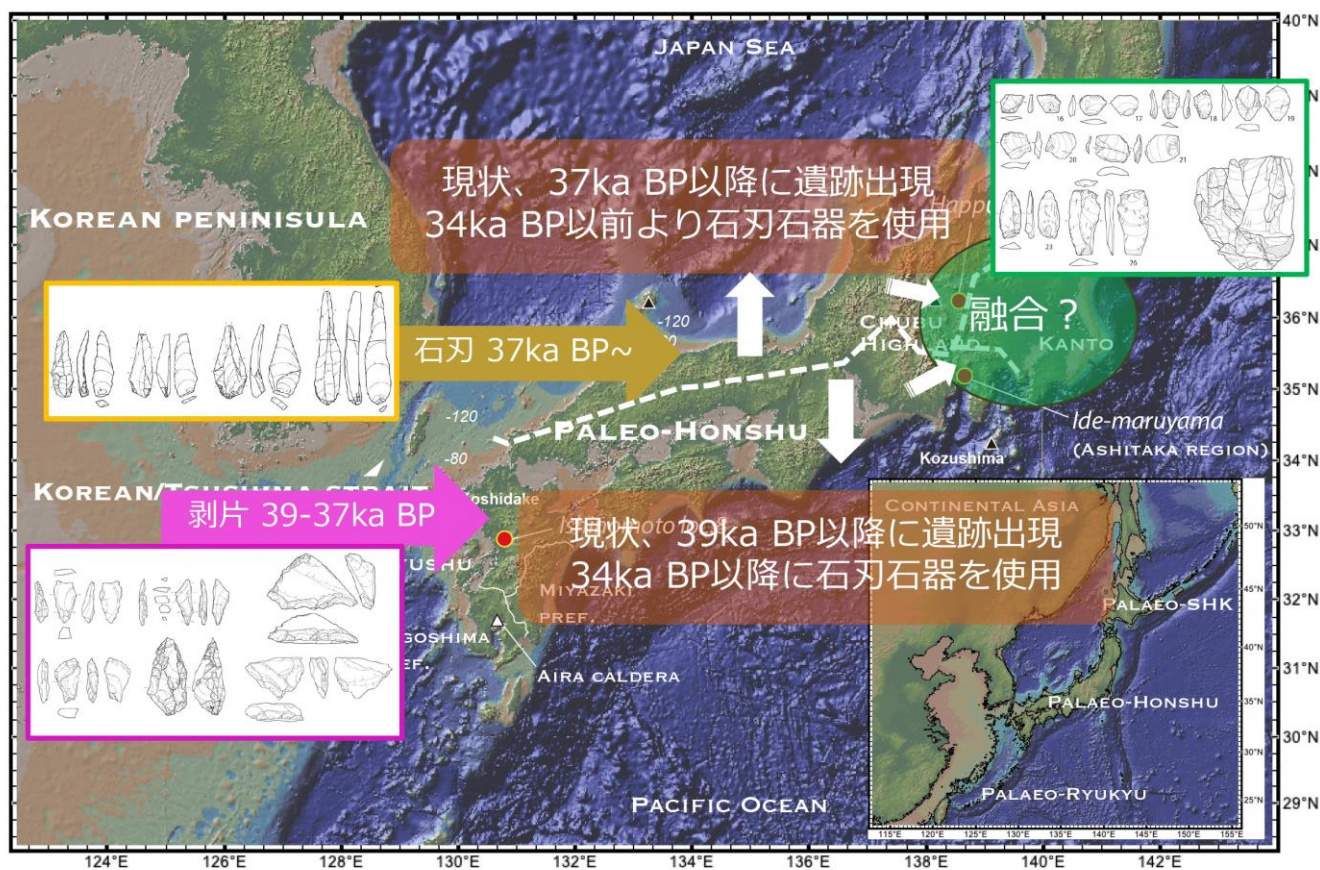


図6 後期旧石器時代開始期の石器群・ルート・分布
(森先一貴 2023「下原洞穴遺跡シンポジウム」発表資料)

(地図は GeoMapApp (www.geomapapp.org)/CC BY により筆者作成)

旧石器関連用語解説

①海洋酸素同位体（かいようさんそどういたい）を用いた気候変動研究

酸素の三種類の同位体のうち、軽いもの（ ^{16}O ）と重いもの（ ^{18}O ）の海水における存在比で気候変動を読み解く。海水から蒸発して極地等の氷床に取り込まれ固定され易いのは軽い水であるため、氷床拡大期（寒冷期）には海水は重い水が中心になり、氷床縮小期（温暖期）にはその逆となる。これを $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ の割合として表現し、その時間的变化で気候変動の代替指標とする。

②台形様石器（だいけいようせっき）

剥片を素材として二次加工で形を整え、おおむね台形状に仕上げた石器。ペン先状のものも含める。製作・使用実験をふまえ、その一部は投槍器や弓を用いて投射した狩猟具の先端であったとする研究がある。

③石刃、剥片、細石刃（せきじん、はくへん、さいせきじん）

利器としての石器の作り方にはいくつかの方法がある。細長く鋭い縁辺をもつ石刃（長さが幅の2倍以上のもの）、そのミニチュア版である細石刃（石刃のうち幅が1cm未満のもの）、そうした特定の形をもたない剥片を生産することが石器作りの第一ステップ。これらをもとにしてさらに加工を加えて石器に仕上げる。細かくは様々な分類名があるが、大括りにする場合は、その素材名称をつけて剥片石器、石刃石器などと呼ぶ。

④立川ローム（たちかわろーむ）×層

関東地方の台地・丘陵部に分布する第四紀（258～1 万年前）終わり頃の堆積物で、砂や粘土が一定の割合で混合した壤土（この地域では火山灰を多く含む）を「立川ローム」と呼ぶ。約4万年前以降の堆積物であり、×層はそのほぼ最下層にあたる。一部の研究者により最古の旧石器が含まれる層準とされた。

⑤リダクション

石器は土器のように粘土を継ぎ足して作るのではなく、石を打ち割ってその容積を「減らし」ながら作る。この原料容積を減らす過程をリダクションという。石刃や剥片を作っていく容積減少過程を石刃リダクション、剥片リダクションと呼ぶ。また、そのなかで特定の方法を指し示す場合、さらに細別名称を設けることがある。

【メモ】

日本人はどこから 来たのか

日本の旧石器時代研究はあの時、壊滅的な打撃を受けた。

いわゆる「旧石器捏造問題」だ。

それでも旧石器の研究を志し学術的な研究を進めたのが今の旧石器時代研究者である。

純粹に考古学的方法論だけに固執することなく、地学、古生物学、
古気候学、年代学などとの連携により第四紀学の一員として再出発を期し、
その成果を世界に問うてきた。

濱田青陵賞 36 年の歴史の中で旧石器時代研究が受賞したのはこれが初めてである。

言い換えれば研究がたて直るにはこれだけの時間がかかったとも言えよう。

“それでも、石ころからしかわからないことが詰まっている”

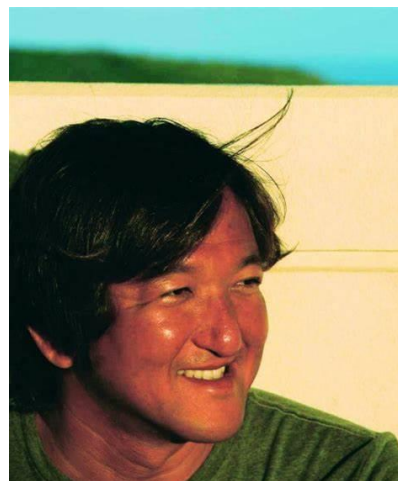
今日、3 名の研究者が“新しい”「旧石器時代」像を探る。

片桐 千亜紀 (かたぎり ちあき)

沖縄県教育庁文化財課主幹／九州大学比較社会文化研究院

共同研究者 ／ 水中考古学 海洋考古学 戦跡考古学

Keyword： 日本人のルーツ 沖縄の水中考古学 島に生きた人々



〔略歴〕

1976 年 長野県生まれ
1999 年 沖縄国際大学文学部社会学会考古学専攻卒業
中野市歴史民俗資料館 臨時職員
2000 年 沖縄県立埋蔵文化財センター 専門員
2011 年 沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員
2017 年 九州大学比較社会文化研究院 共同研究者
2024 年 沖縄県教育庁文化財課 主幹

〔主な論著〕

- Katagiri, C., Nakanishi, Y., Yoshizaki, S., Kimura, H., Kan, H. (2022) Reconstructing a WWII underwater wreck site: the battle of the destroyer USS Emmons and Japanese Special Attack Airplanes. International Journal of Nautical Archaeology.
- Katagiri Chiaki, Ono Rintaro, Yumiko Nakanishi, Miyagi Hiroki.(2020) Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago in IKUWA6. Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology.
- 片桐千亜紀 2024 「琉球列島の崖墓文化-更新世から現代まで-」『島世界の葬墓制—琉球・海城アジア・オセアニア—』雄山閣
- 片桐千亜紀 2022 「縄文文化圏の外側 先島諸島」『季刊考古学 海洋進出の初源史』161 雄山閣
- 片桐千亜紀 2019 「崖墓文化の起源を探る」『図書』2 岩波書店
- 片桐千亜紀 2016 「インドネシア・スラウェシ島に崖墓文化を求めて」『廣友会誌』第9号
- 片桐千亜紀 2014 「琉球列島における先史時代の崖墓」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』研究論文集第2集 高宮広土・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』

「南の島の旧石器時代」

1. はじめに

南西諸島は九州島南方から台湾以東にかけ、約 1,200km にわたる広大な海域に点在する島々です。東南アジアの熱帯、日本本土の温帯の中間に位置することから一般的に亜熱帯性気候と呼ばれ、冬季は温暖で四季の変化は不明瞭です。特に奄美群島から八重山諸島にかけてはなんだかとても暑い島々の印象を受けますが、冬は雪が降らないし、近年は日本本土の夏の方がより高温となりますので、「沖縄に寒さを逃れて来た」、「沖縄に避暑に来た」なんて言葉も良く耳にするほど、過ごしやすい島々です（個人差あり）。

そんな南西諸島は薩南諸島から奄美群島までが鹿児島県、沖縄諸島から八重山諸島までが沖縄県と行政区分されており、それぞれ独特の文化が育まれています。そのユニークさは、なんと旧石器時代に遡っても同様で、これまで南西諸島では 16 ヶ所の旧石器時代遺跡が確認されており、その内訳は鹿児島県側が 5 遺跡、沖縄県側が 11 遺跡となっていますが、鹿児島県側は石器ばかりが見つかり、沖縄県側は人骨が中心的に見つかりております（第 1 表）。後世の人間が決めた行政区分なのに、なんでそんな違いが、、、と不思議に思いますが、とにかく人骨が多く見つかることに注目し、南島ならではの旧石器時代の一端を紹介しようと思います。

日本本土では 1 万ヶ所以上の旧石器時代が確認されていますが、実は、人骨が見つかるのは静岡県の浜北遺跡の 1 ヶ所のみです。つまり、現在の日本では旧石器時代人の姿形、どのように生きて死に、そして葬られたのかを知ることができるのは沖縄県の旧石器時代遺跡のみなのです。

2. 南島旧石器時代人の物質文化

沖縄県で確認されている 11 ヶ所の旧石器時代遺跡の内、まだ人骨が発見されていないのは 32,000～18,000 年前の炉跡が見つかった普天間宮洞穴遺跡の 1 遺跡で、これとても継続的な発掘調査が始まったばかりの遺跡ですので、今後、発見される可能性はおおいにあるでしょう。また、人骨以外の遺物が見つかるのは、山下町第一洞穴遺跡とサキタリ洞遺跡の 2 遺跡です。前者は日本最古の 36,000 年前の人骨が見つかったことで有名ですが、礫石器も確認されています。沖縄県では、どういうことか人骨以外の遺物の発見が稀ですので、礫石器の発見は重要です。そして、現在の沖縄県で南島の旧石器時代人の物質文化を最も知ることができるのが、後者のサキタリ洞穴遺跡です。2009 年から沖縄県立博物館・美術館による発掘調査が継続的に実施されており、23,000～20,000 年前の地層からは、世界最古の釣針（第 1 図）、加工具、貝ビーズ（第 2 図）といった装飾品など、多様な貝を利用した製品が、14,000 年前の地層からは遺跡周辺では産出しない石英製の石器が発見されています。また、モクズガニやカワニナ、カタツムリなどの食糧残滓も大量に発見されています（山崎 2016、Masaki, et, al.,2016 など）。

サキタリ洞穴遺跡の発掘調査によって、南島の旧石器時代人は多種多様な貝を利用した製品を制作し、生活圏にはない石器石材を遠方から運び込み、美味しいカニなど、河川から得られた食糧を積極的に食べていたことが初めて明らかとなったのです。

3. 旧石器時代の墓地 -白保竿根田原洞穴遺跡-

（1）人骨の宝庫沖縄

沖縄県で確認されている 11 ヶ所の旧石器時代遺跡の内、10 ヶ所で人骨が発見されており、さらにそのうち 8 ヶ所は人骨のみというちょっと信じがたい遺跡の状況が沖縄のユ

ニークなところです。1968 年に発見された港川人骨は成人男女の全身骨格が良く保存されていたことから、アジア有数の貴重な人骨群と認識されています。また、沖縄県内の旧石器時代遺跡からは、成人男女だけでなく乳幼児（下地原洞穴遺跡）や幼児（山下町第一洞穴遺跡）までも発見されおり、南島旧石器時代人が集団で島で生活し子供を育て、死を迎えていたことを知ることができます。

このような状況の中、2009 年に発見され 2010 年から 2016 年まで沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた白保竿根田原洞穴遺跡からは、1,000 点以上、最小個体数 19 体もの旧石器時代人骨が発見され、日本国内ではまったく知ることができなかった南島旧石器時代人の葬墓制の一端、それもとて南島らしいと思える様相が明らかとなりました（白保竿根田原洞穴遺跡に関しては仲座 2013・2017a・2017b、片桐 2019 を参照）。

（2）墓地の場所がわかった

白保竿根田原洞穴遺跡の洞穴開口部の標高は約 30m、洞床はそこを最高所として、階段状に深度を下げていく構造です。あちこちに数万年前に天井から崩落した巨大な石灰岩塊が露出していて、平坦面は岩塊と岩塊の隙間に充填された土壌にあるのみでした。このような洞穴環境の中で、人骨は 5 つの集中区（以下、ユニットと呼びます）からまとまって確認されました。それぞれのユニットは、解剖学的位置関係（以下、ヒトの形と呼びます）を保っていないバラバラの人骨がほとんどで個体の識別ができないものの、複数体分の人骨が含まれていました。この状況は、それぞれのユニットが遺体を繰り返し意識的に葬る墓として利用されていたことを示していると考えられ、そのような墓が 5 つも確認されたのです。

一方、本洞穴からは石器や貝器と言った生活に関する道具類は発見されませんでした。このことは、南島旧石器時代人がこの洞穴に人を葬っている時代、この洞穴を生活の場としては利用していなかった可能性が高い事を示しています。

つまり、本洞穴を利用した人類はこの洞穴を生活の場ではなく、洞穴全体をあたかもいくつもの墓からなる墓地として認識し、現代人がするように、生活の場（洞穴の外）と死者の場（洞穴）をはっきり区別していた可能性があることがわかりました。

（3）遺体の葬り方がわかった

本遺跡によって南島旧石器時代人の遺体の葬り方（葬法）までも明らかとなりました。ユニット 4 から発見された 4 号人骨は岩陰の隙間に押し込められるように葬られており、一見バラバラに見えますが、1 個体分の人骨がほとんどヒトの形を保っていました。姿勢は仰臥屈曲で両腕は肘を折り曲げて手を顔の近くに添えるものと推定されます（第 3 図）。通常、遺体を土中に埋葬した場合、周囲に空間がないために、骨同士は、

腐食した肉が無くなった後もほとんど関節しており、ヒトの形をきれいに保つことになります。4号人骨は、葬られた姿勢まで復元できるものでしたが、実は、様々なパーツに乱れが見られました。この事は、遺体が土中に埋まっていない状態で腐食して骨化したことを示しています。露出された空間で骨化したことから、重力の作用と床の地形によって骨に乱れが生じたものと考えられます。つまり、死後、遺体は土中に埋葬されず岩陰に置かれて風葬されたと判断されます。遺体を土中に埋めずに人を葬る方法が南島の旧石器時代に存在したようです。これはとても重要なことです。

その他、ユニット2では、やはりヒトの形を保たないバラバラ人骨群が石灰岩の壁沿いとその平坦面に密集し、最少個体数で6体分もの人骨が確認されました。その内、1号人骨は密集場所からやや離れて発見されました。頭骨、左右の（第4図）大腿骨、寛骨が並んでおり、ヒトの形を保っていることをうかがわせます。姿勢や頭位も4号人骨と同様と考えられます。この個体の他の部位は他の5体分の密集場所に集中しているようでした。このことから、1号人骨はこのユニットに最後に葬られた人の可能性があります。

このように、洞穴を墓地として、以前に葬られた人骨をその壁際に集め、新しい遺体を同じ場所に追葬していく葬墓制は、沖縄の近世・近代に隆盛した崖葬墓（風葬墓）文化と類似しています。

（4）葬る人を区別する意識があった

本遺跡から出土した人骨の調査によって、この洞穴で行われたさらに興味深い南島旧石器時代人の文化的活動がわかりました。それは、この墓に葬られた19体を数える最少個体数の内、18体が成人男女であり、未成人はたった1体のみで、乳児や乳幼児はまったく確認されなかったという事です（土肥 2017）。少なくとも19体もの人を葬った集団墓地を発掘したにもかかわらず、この構成は明らかに偏りがあり、何らかの意図があったと想像させます。この洞穴を墓とした人類は、この洞穴は成人した男女を葬る墓であると認識しており、未成人（若年）や乳児、乳幼児は意識的に別の場所に葬ることとしていた文化を持っていた可能性があるのではないのでしょうか。

4. 周辺地域の崖葬墓

（1）比較研究をしてみよう

白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査によって、南島旧石器時代人の葬墓制の一端が明らかとなりました。こうなると、次に、研究者は比較をしたくなるのですが、残念ながら日本国内では旧石器時代の明確な墓が確認された事例はありません。本遺跡が旧石器時代の一般的な事例なのか、特殊な事例なのかすらわからないのです。そこで、本遺跡と似た事例を求めて沖縄の旧石器時代以降の遺跡や時代も地域も超えて東南アジアの事例

と比較をしてみたいと思います。

（２）琉球列島の崖葬墓文化

琉球列島には岩陰や洞穴を墓とし、遺体を風葬して骨化させ、骨化後も遺骨は地中に埋めずに地上に安置する葬墓制があり、琉球王国時代にはその文化がピークを迎えます。この時代、自然の岩陰や洞穴を利用するだけでなく、崖面を無理矢理掘り込んで墓としての空間を確保するものもあり、崖や洞穴で墓を営む意欲に満ちています。遺体は墓内で風葬し、骨化後には蔵骨器に納められたり、イケ（池）と呼ばれる場所に合葬されます（第5図）。このような葬墓制を崖葬墓と呼んでいますが、実は、琉球王国時代だけでなく、グスク時代を経て先史時代まで遡る文化として存在していたことが、発掘調査の積み重ねによって明らかになりつつあります。各時代の崖葬墓文化に共通する特徴は、①岩陰や洞穴を利用する。②遺骨は地下に埋めず地上に安置する、③遺骨はある特殊な場合を除きヒトの形は保っておらずバラバラの状態、④追葬が繰り返された結果、複数体が合葬されてひとつの墓となる、です。

また、一見バラバラの人骨群の中には、ヒトの形を保っている人骨が紛れていることが多々あります。これには様々な理由が考えられますが、最も蓋然性が高いのは、次の被葬者がいないまま墓が廃棄された結果、最後に風葬された遺体が集骨されずにその場所に残されたと考えるものです。近世・近代では遺体を風葬する場所を「シルヒラシ」と呼んでおり、古墓の発掘調査を実施すると、この場所からヒトの形を保つ一次葬段階の人骨が発見されることがあります。例えば、那覇市銘苅古墓群（近世）の墓内で確認された人骨は、風葬されたため骨の配置に乱れは見られますが、ヒトの形を保っていました。なんらかの事情によって、蔵骨器やイケに再葬されなかった最後の被葬者と考えられます。

琉球王国前半と考えられるナカンダカリ山古墓群7号墓は、石灰岩の崖を掘り込んで墓としています。複数体分のヒトの形を保たないバラバラの人骨が奥壁に集中しており、二次的に集められたものとわかります（第6図）。しかし、入口付近には一見バラバラですが、かろうじてヒトの形を保つ人骨が3体分発見されました。この場所での一次葬が風葬によって行われた証拠と考えられます。この墓は、遺体は風葬によって骨化させ、以前に葬られた遺体は奥壁側に押しやりながら、同じ場所に遺体を追葬していく崖葬墓だったことがわかります（土肥 2005）。

サキタリ洞遺跡Ⅱ区で発見されたグスク時代初期の崖葬墓は、自然の洞穴の壁際を利用していますが、石積みによって囲いをしており、遺体を葬る墓と生活の空間を区画しています。やはりヒトの形を保たない複数体分のバラバラの人骨が壁際に集中しており、二次的に集められたことがわかります。しかし、そのやや手前側で発見された人骨は、椎骨が並んだり、肋骨が関節しているものがあり、一部ヒトの形を保っていました（山崎 2016）。この墓も、この場所で風葬による一次葬と集骨が行われたと考えられ、

グスク時代初期に遡って崖葬墓が営まれていたことが明らかとなりました。

では、先史時代はどうでしょうか。具志川島遺跡群岩立遺跡西区で発見された縄文時代後期の崖葬墓は、石灰岩の岩陰を利用しています。ヒトの形を保たない複数体分のバラバラの人骨が壁際に集中しており、二次的に集められたことがわかります。この人骨群にも、やはり、かろうじてヒトの形を保つ人骨が発見されています。二次的に人骨を集めているのはその人骨の足元の方でした（土肥 2012）。この状況も、この岩陰で風葬による一次葬と集骨が行われた結果と考えられ、縄文時代後期にはすでにこのような崖葬墓文化が存在したことを表しています。

先史時代の崖葬墓の分布状況を見ると、北は徳之島の喜念原始墓や喜念クバンシャ岩陰墓、南は先島諸島の石垣島白保竿根田原洞穴遺跡まで確認されています。このことから、先史時代に崖葬墓を営む行為は、北はトカラ構造海峡を越えていませんが、南は完新世後半には文化的接触が希薄だったと考えられる沖縄諸島と先島諸島の境界である慶良間構造海裂を越えて分布していることが明かです（片桐 2014）。

南島旧石器時代人が利用した墓地である白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査成果は、沖縄の崖葬墓文化の起源が旧石器時代にまで遡る文化だった可能性があることを示唆する画期的なものだと考えます（第7図）。

（3）東アジアから東南アジア島嶼部の崖葬墓文化

さらに比較の範囲を広げてみると、このような崖葬墓文化は、琉球列島のみに見られるものではないことがわかってきました。時代を問わなければ、東アジア、東南アジアの島嶼部に広がっている事例があります。台湾蘭嶼島では海岸に突き出た岩山崖面のわずかな平場に人骨が散乱している状況を見たことがあります。人骨の多くは失われていましたが、四肢骨や遊離歯などが散乱しており、この場所を崖葬墓として利用した可能性が考えられます。

フィリピンのミンダナオ島アユーブ洞穴遺跡（紀元前後）では人骨を蔵骨器に再葬し洞穴内に安置する再葬墓が発見されています（DIZON, E. Z, & R. SANTIAGO. 1996）。洞穴を墓として利用し、遺体を土中に埋めない文化があったことがわかります。

インドネシアのスラウェシ島タナ・トラジャでは、岩陰や洞穴を墓とし、バラバラの遺骨を複数体分まとめて合葬する葬墓制が民俗事例として知られています。蔵骨器（木棺）の中に複数体の遺骨を合葬するものもあれば（第8図）、蔵骨器を用いずに壁際に集骨・合葬するものもあります（第9図）。沖縄のように、崖を掘り込み、墓の空間を確保して人骨を合葬するものもあります（片桐 2016）。また、考古学的証拠として、同じくスラウェシ島のトボガロ洞穴遺跡群や、スラウェシ島の東に位置するマルク諸島モロタイ島のアル・マナラ岩陰遺跡では、約 2,000 年前の初期金属器時代の崖葬墓が発見されており、インドネシアの崖葬墓文化がこの時期まで遡ることがわかりました（Ono,

et, al.,2017)。バリ島のバトゥール湖畔のトゥルニャン村では巨大な岩陰で今も風葬を行っており、風葬後は頭骨のみを特別に再葬し、体は他の遺体とともに合葬する状況を見ることができました。これらは、崖葬墓文化がスラウェシ島やバリ島に存在する証拠と考えられます。

まだまだ事例は少ないものの、崖葬墓文化はアジアから東南アジア島嶼部に広がっていることは確かであり、琉球列島はその北縁となるのではないのでしょうか（第10図）。

5. 終わりに

これまで、日本列島では旧石器時代人が作った道具である旧石器を中心としてその文化的活動が推測されてきましたが、その旧石器時代人がどのような葬墓制を営んだのか知ることはできませんでした。しかし、白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査によって、少なくとも約 27,000 年以降から石垣島に生息していた南島旧石器時代人の葬墓制について、新たな知見を得ることができました。それらは、洞穴を境界とした生の世界と死の世界の区別であったり、成人であるか否か、幼児・乳幼児ではないこと、など成長段階によって墓に葬る対象を区別するなど琉球列島で近世・近代に隆盛した崖葬墓文化の起源が、これまで知られていたように縄文時代ではなく旧石器時代にまで遡る可能性を示唆するものでした。さらにこのような崖葬墓文化はアジアや東南アジア島嶼部といった広大な海域にも見られることがわかりました。

現在、最も古い崖葬墓の事例は旧石器時代に遡る琉球列島の白保竿根田原洞穴遺跡です。しかし、最後に希望に推測を重ねることとなりますが、今後、アジアや東南アジア島嶼部では琉球列島よりさらに古い時代に遡る崖葬墓が発見される可能性はじゅうぶんあると思っています。そうなった時、南島旧石器時代人がどこから琉球列島にやってきたのか、推測することができるようになるかもしれません。

【引用・参考文献】

- 大阪府立弥生文化博物館 2017 平成 29 年度大阪府立弥生文化博物館夏季特別展『沖縄の旧石器人の南島文化』
- 片桐千亜紀 2014 「琉球列島における先史時代の崖葬墓」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』研究論文集第2集 高宮広土・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』
- 片桐千亜紀 2016 「インドネシア・スラウェシ島に崖葬墓文化を求めて」『廣友会誌』第9号
- 片桐千亜紀（編）2019『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告2—補遺編—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 土肥直美 2005 「第VI章人骨」『ナカンダカヤマの古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 土肥直美 2012 「第11章 具志川島遺跡群の人骨」『具志川島遺跡群』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 土肥直美・徳嶺里江・片桐千亜紀・河野礼子 2017「出土人骨の分布」『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告2—総括報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜（編）2013『白保竿根田原洞穴遺跡—新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター

- 仲座久宜（編）2017a『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告 1—事実報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜（編）2017b『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告 2—総括報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 1999 『銘苅古墓群（VI）』那覇市教育委員会
- 山崎真治 2016 『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書（Ⅲ）』沖縄県立博物館・美術館
- DIZON, E. Z, & R. SANTIAGO.1996. Faces from Maitum: The archaeological excavation of Ayub Cave. Manila: Tha National Museum of the Philippines.
- Masaki Fujita, Shinji Yamasaki, Chiaki Katagiri, Itsuro Oshiro, Katsuhiro Sano, Taiji Kurozumi, Hiroshi Sugawara, Dai Kunikita, Hiroyuki Matsuzaki, Akihiro Kano, Tomoyo Okumura, Tomomi Sone, Hikaru Fujita, Satoshi Kobayashi, Toru Naruse, Megumi Kondo, Shuji Matsu'ura, Gen Suwa, Yousuke Kaifu (2016) Advanced maritime adaptation in the western Pacific coastal region extends back to 35,000–30,000 years before present. PNAS. Vol,113.
- Ono, R. A. Octaviana, F. Aziz D. Prastiningtyas, N. Iriyanto M. Ririmasei, I. B. Zesse, Y. Hisa. (2017). Development of Regional Maritime Networks during the Early Metal Ages in Northern Maluku Islands: A view from excavated pottery and glass ornaments. Journal of Island and Coastal Archaeology.

No.	行政区	遺跡名	島	年代	主な出土品
1	鹿児島県	立切遺跡（中種子町）	種子島	35,000年前	石器・礫群
2		横峯C遺跡（南種子町）	種子島	35,000年前	石器・礫群
3		土浜ヤーヤ遺跡（奄美市）	奄美大島	後期更新世	石器
4		喜子川遺跡（奄美市）	奄美大島	後期更新世	石器・礫群
5		ガラ竿遺跡（伊仙町）	徳之島	後期更新世	石器
6	沖縄県	カダ原洞穴遺跡（伊江村）	伊江島	後期更新世	人骨
7		ゴヘズ洞穴遺跡（伊江村）	伊江島	後期更新世	人骨
8		下地原洞穴遺跡（久米島町）	久米島	18,000年前	人骨
9		桃原洞穴遺跡（北谷町・沖縄市）	沖縄島	後期更新世	人骨
10		大山洞穴遺跡（宜野湾市）	沖縄島	後期更新世	人骨
11		普天間洞穴遺跡（宜野湾市）	沖縄島	32,000～18,000年前	炉跡
12		山下町第1洞穴遺跡（那覇市）	沖縄島	36,000年前	人骨・石器
13		港川遺跡（八重瀬町）	沖縄島	22,000年前	人骨
14		サキタリ洞穴遺跡（南城市）	沖縄島	30,000～10,000年前	人骨・石器
15		ピンザアブ遺跡（宮古島市）	宮古島	30,000年前	人骨
16		白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）	石垣島	27,000～10,000年前	人骨

※大阪府立弥生文化博物館夏季特別展『沖縄の旧石器人と南島文化』2017年を参考に加筆

第1表 琉球列島の旧石器時代の遺跡



第1図 サキタリ洞遺跡から出土した世界最古の貝製釣針

(平成29年度大阪府立弥生文化博物館夏季特別展『沖縄の旧石器人の南島文化』より転載)

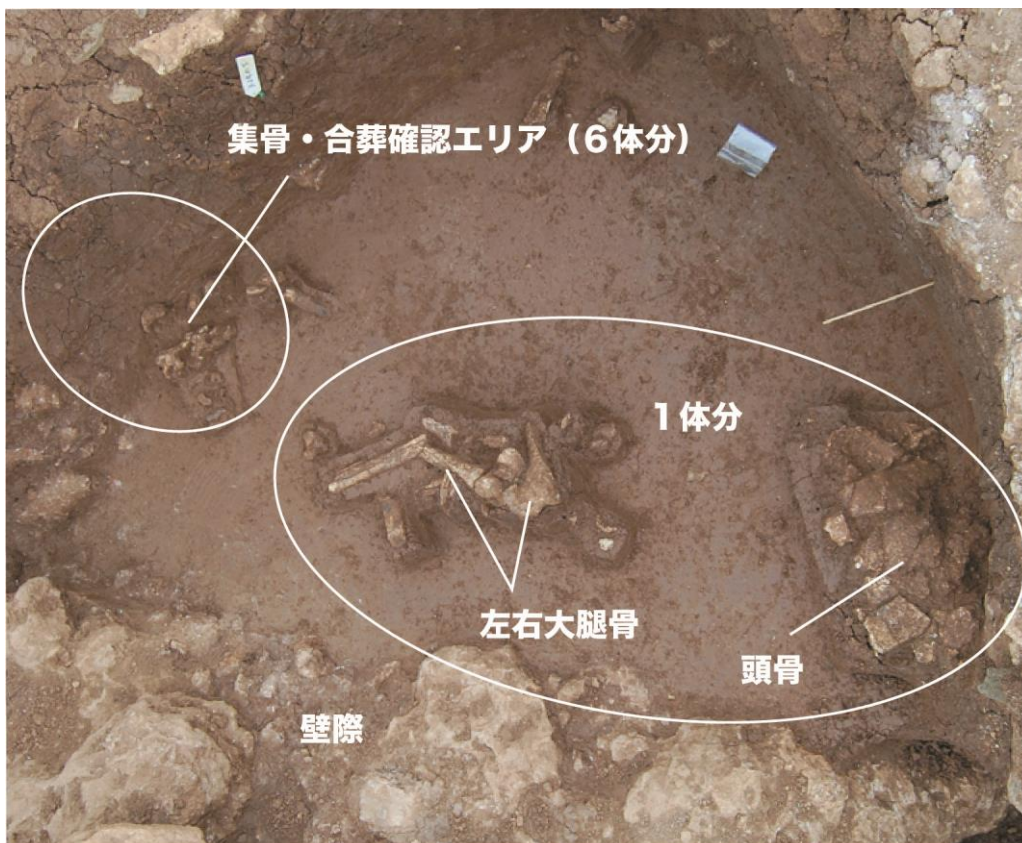


第2図 サキタリ洞遺跡から出土した貝製ビーズ

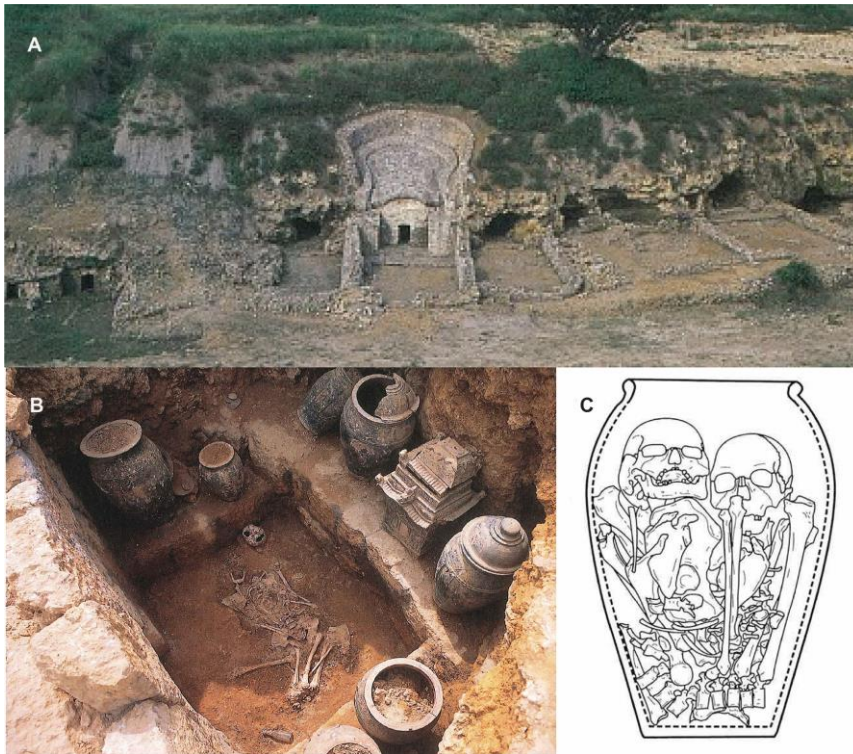
(平成29年度大阪府立弥生文化博物館夏季特別展『沖縄の旧石器人の南島文化』より転載)



第3図 白保竿根田原洞穴
遺跡4号人骨の葬られ方
(仲座 2017b を転載、加筆)



第4図 白保竿根田原洞穴遺跡ユニット1の人骨検出状況
(仲座 2017b を転載、加筆)

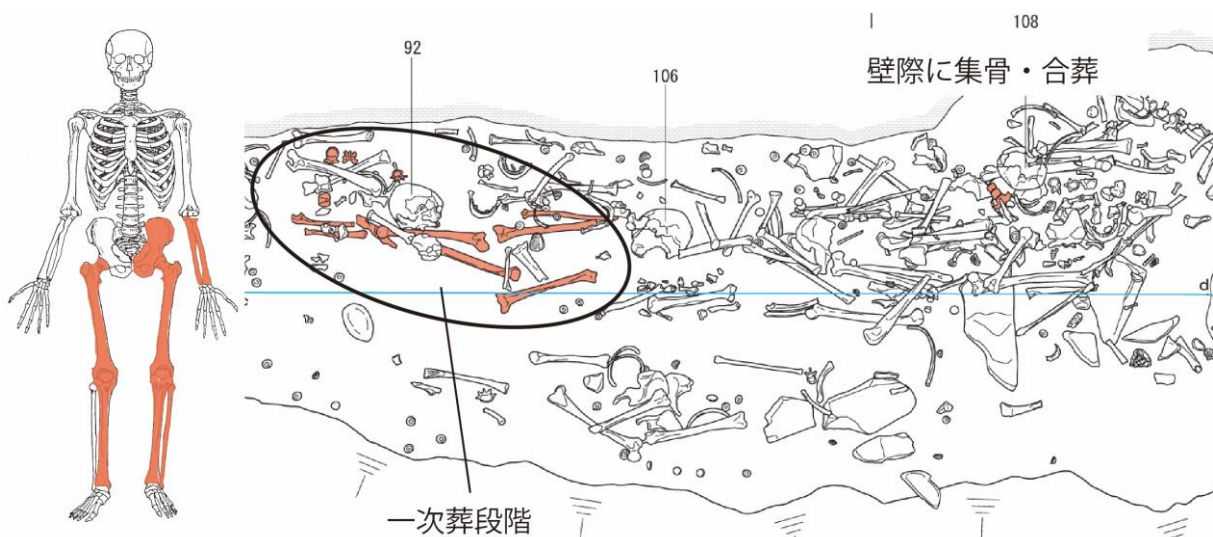


第5図 琉球王国時代の崖葬墓（風葬墓）の事例

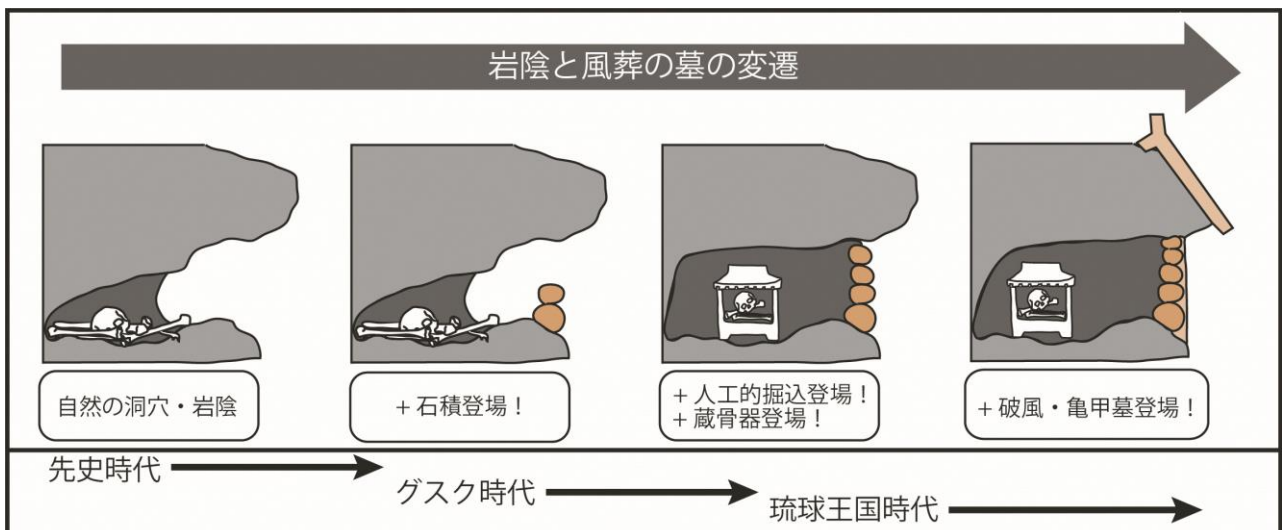
A) 銘苅古墓群（那覇市教育委員会 1999 より転載）

B) 風葬墓の内部（那覇市教育委員会 1999 より転載）

C) 蔵骨器の中（西銘 2011 より転載）



第6図 縄文時代後期の崖葬墓（土肥 2012 を転載、加筆）



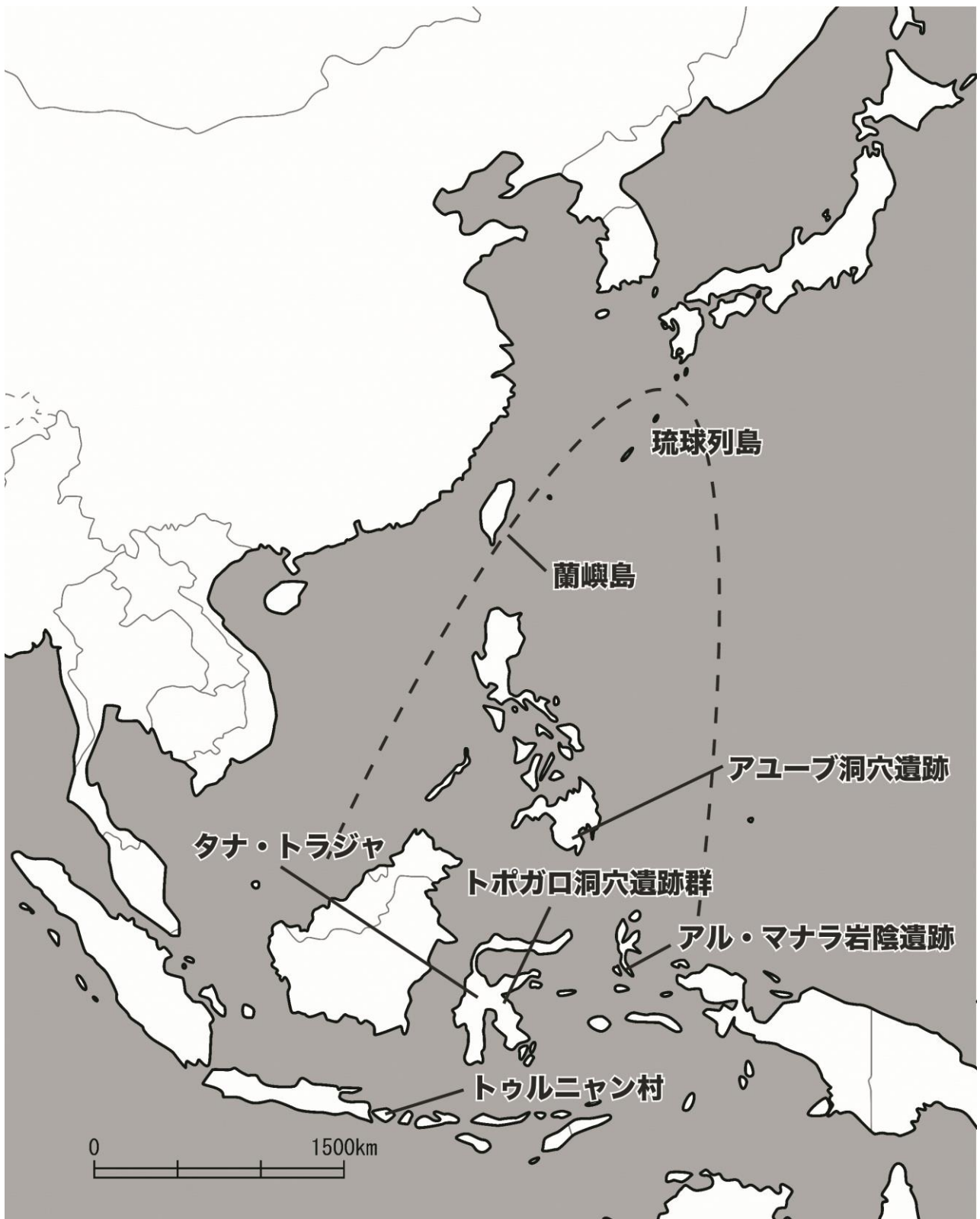
第7図 崖葬墓の変遷



第8図 ケテ・ケスの崖葬墓



第9図 タンパガロの崖葬墓



第10図 想定される崖葬墓文化の広がり

河野礼子（こうの れいこ）

慶應義塾大学文学部教授／自然人類学

Keyword：人類進化・類人猿・大臼歯・形態・旧石器・
白保竿根田原洞穴遺跡・3D プリンター

〔略歴〕

東京都生まれ

東京大学理学部卒業 東京大学大学院理学系研究科博士
課程修了 博士（理学）東京大学

独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究員・研究主幹を経て
2017 年（平成 29）より慶應義塾大学に着任



〔主な論著〕

- ・「人類の進化」『シリーズ地球生命史 6 人類の進化 一第四紀一』共立出版、2024 年.
- ・「猿人とはどんな人類だったのか？ 一最古の人類」『人間の本質にせまる科学 自然人類学の挑戦』東京大学出版会、2021 年.
- ・「白保 4 号頭骨の分析と復元」学術の動向、2020 年.
- ・「人類進化の群れ・集団・組織」『生命の教養学 15 組織としての生命』慶應義塾大学出版会、2019 年.
- ・「3 次元デジタル復元に基づく白保 4 号頭蓋形態の予備的分析と顔貌の復元」 *Anthropological Science (Japanese Series)*, 2018 年（共著）.
- ・「自然科学における 3 次元プリンターの活用事例」慶應義塾大学日吉紀要 自然科学、2018 年.
- ・『ドラえもん科学ワールド 一人類進化の不思議一』小学館、2018 年（監修）.
- ・「A 3-dimensional assessment of molar enamel thickness and distribution pattern in *Gigantopithecus blacki*」 *Quaternary International*, 2014 年（共著）.
- ・「Molar enamel thickness and distribution patterns in extant great apes and humans: new insights based on a 3-dimensional whole crown perspective」 *Anthropological Science*, 2004 年.

「骨から見た日本列島人の由来」

はじめに

日本列島の人がどこから来たのか、日本で人類学会が創設された 1884 年かそれ以前から、140 年以上にわたって研究されてきたテーマである。日本列島人形成における縄文人と弥生人の役割を説明する二重構造説が提示されるなど古人骨の研究からもある程度は分かっていた。しかし、最近 20 年ほどの間の遺伝子研究の発展は目覚ましく、日本人の由来についても驚くほどの勢いで様々なことが明らかになってきている。

本日の発表では、従来の骨の研究と最近の遺伝子研究の成果を概観し、最後に近年新たに発見された沖縄の旧石器人骨の研究の様子を紹介する。

1. 骨からわかったこと

1.1 旧石器人

酸性土壌の多い日本列島では骨は分解されやすく、旧石器時代の遺跡が数多く存在するにもかかわらず、その遺跡を作ったであろう人自身の痕跡はあまり多く残っていない。旧石器時代のものとされる人骨資料はかつて本州や九州などの複数地点で発見されたが、その後の年代の見直しなどによって、現在では琉球列島以外の証拠はほぼ否定されてしまい、唯一、静岡県の浜北遺跡の人骨資料だけが現在でも旧石器時代のものと判断される（近藤・松浦、2007；図1）。

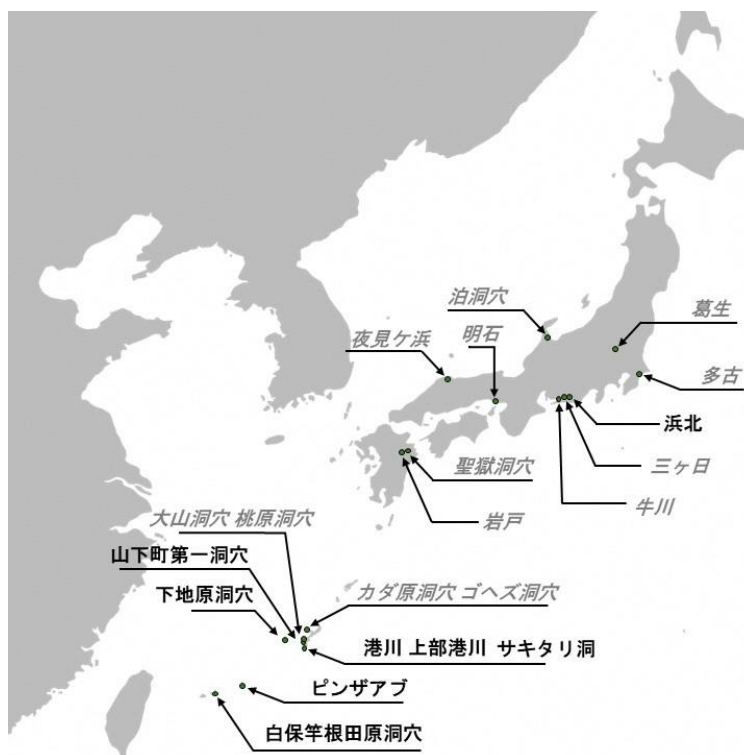


図1 日本の「旧石器時代人骨」として報告された資料の分布

斜字体で示した遺跡は旧石器時代にさかのぼらないことが明らかになったもの、不確実であるもの、あるいは断片的で研究が困難なもの。近藤・松浦（2007）の図1をもとに作成・追加。

一方、琉球列島からは今のところもっとも年代が古い山下町洞穴や、宮古島のピンザブ、久米島の下地原など、複数の旧石器人骨が発見されている。これらの資料は断片的であるのに対して、沖縄本島南部に位置する港川遺跡からは約2万年前の旧石器人骨が少なくとも5個体

分発見されている。特に港川1号と呼ばれる男性のほぼ全身骨は、長年、日本列島の旧石器人を代表する存在であった。港川1号の推定身長は153 cmと小柄であり、いわゆる「島嶼効果」の影響があったと考えられている（馬場、2020）。鎖骨が短く肩幅が狭いなど上半身は細めであるのに対して、下半身はしっかりとしていた。頭骨は厚く、眼窩の後ろが強く狭窄する。下顎骨も頑丈で、推定される死亡年齢に対して歯の摩耗が非常に進んでいる、などの特徴がある。かつて縄文時代人との類似性も指摘されたが、その後はインドネシアのワジャク人やオーストラリア先住民との類似が示されるなど、縄文時代人の直接の祖先ではない可能性が考えられている（馬場、2020 など）。

1.2 縄文人と弥生人

縄文時代になると、貝塚が作られたおかげで、骨も数多く残されており、これまでに全国でかなりの数の縄文人骨が発掘されている。縄文時代人には、低顔で眼窩が四角く顔の彫りが深いことや、四肢の遠位が長いこと、大腿骨の柱状性、脛骨の扁平性などの共通した特徴が認められる。続く弥生時代には貝塚は作られなくなるが、甕棺に埋葬されたり、砂浜に埋められるなど、人骨が残るケースもある。特に九州北部や山口県などで発見された弥生時代の人骨からは、高身長であり、顔は高く平坦で、四肢の遠位が相対的に短いなど、縄文時代人とは異なる特徴が認められた。一方、同じ九州でも西北部や種子島では縄文時代人とよく似た特徴をもつ弥生時代の人骨が発見された例もある。

1.3 二重構造モデル

縄文時代人と明確に異なる特徴をもつ弥生時代人は、大陸から稲作農耕を持って入ってきた「渡来人」と考えられた。一方、日本列島の現代人の各種特徴に関する地域差の分析がさまざまに実施されたことによって、たとえば耳垢のタイプや、毛の濃さ、蒙古ひだなどについて、地域差の様相が必ずしも列島の南北軸に沿ったものにはなっておらず、北海道アイヌの人々と沖縄の人々の間に類似性が認められることが分かっていた。埴原和郎は、こうした知見を合わせて日本列島人の成り立ちについて「二重構造説」を提案した（Hanihara, 1991）。二重構造説では、縄文人は旧石器時代の東南アジア人に由来し、弥生時代に大陸から朝鮮半島経由で渡来した北東アジア人との間で混血が進んだが、南北に距離のある北海道と沖縄には渡来人の影響がほとんど及ばなかったために、アイヌと沖縄の人々は縄文時代人の直系の子孫である、と説明する。

2. 遺伝子からわかってきたこと

2.1 現代人のゲノムから

近年の遺伝子分析技術の目覚ましい発展により、核ゲノムの解読が急速に進んでいる。現代人のゲノムを比較することによる系統関係の分析が多数行われており、アジアの人を対象とした研究も実施された。それによると、アジアの73集団の系統関係としては、インドの人々からまずマレーシア、インドネシア、フィリピン、タイなど東南アジアの人々が分岐し、次に東アジアの中国・韓国・日本人が分岐した、という結果であった（HUGO Pan-Asian SNP Consortium, 2009）。この結果からは、東アジア人は東南アジアに由来しており、南から入ってきたということが示唆される。考古学の示す「北ルート」とは一致しない結果である。

2.2 縄文人のゲノム分析

縄文時代人骨からDNAを回収し分析しようという試みがなされ、これまでに4個体分

の縄文人の核 DNA 分析結果が報告されている。東京大学の太田博樹らのグループにより解読された伊川津遺跡出土の女性人骨を含め、アジアの古人骨資料のゲノムを現代人と比較した研究によれば、ユーラシア西部の基層集団から分岐した東ユーラシア集団からまず北ルートと考えられる古シベリア集団が分岐し、残りの南ルートと考えられる集団は東南アジア、東アジア、北東アジア、アメリカ先住民の順に分岐していったことが示され、伊川津人骨については、南ルート集団の中でかなり早い段階で分岐したことが示された (McColl et al., 2018; Gakuhari et al., 2020; 図 2)。

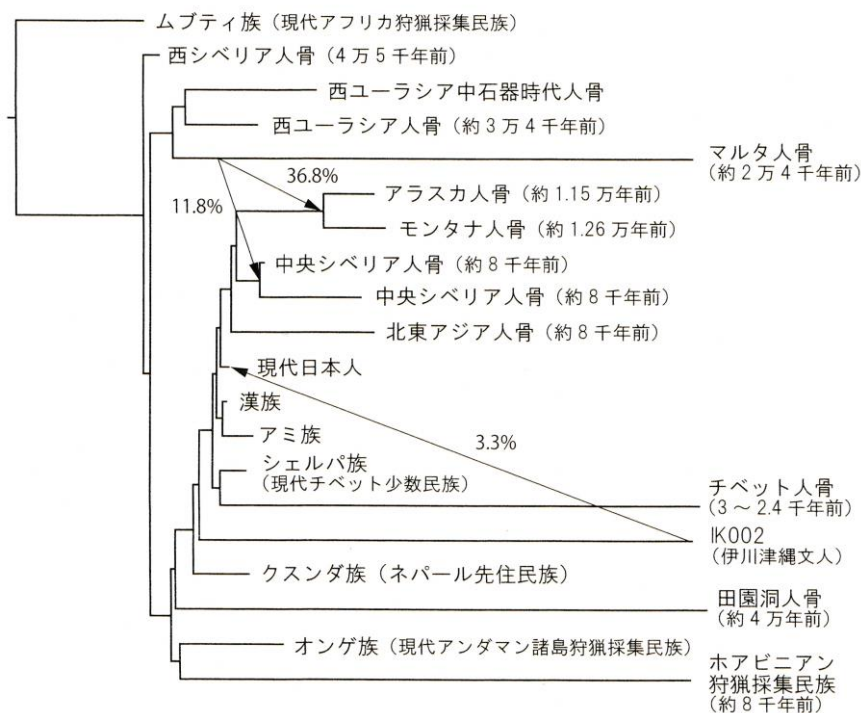


図 2 伊川津縄文人を含めた Treemix による系統図
太田博樹 (2023) の図 26 を転載

しているのである。

また、東京大学の大橋順らのグループは、現代日本人に残る縄文人由来の遺伝子変異を特定し、都道府県別にその保有率を比較した。その結果、東北や鹿児島で保有率が高く、近畿や四国で低いことが示された (Watanabe and Ohashi, 2023)。埴原の二重構造モデルによって提示された縄文人と渡来人の混血の度合いが、地域ごとに異なることを示したと言えよう。大橋らはさらに現代日本人に見られる体質のうち、血糖や中性脂肪が高くなるのが縄文人由来であり、高身長や免疫反応が強くなるのが渡来人由来であると示し、縄文変異の保有率が高い地域では肥満率が高く、低い地域では喘息患者の重症化率が高い傾向が見られたという。

一方、国立科学博物館の神澤秀明らのグループは、福島県の三貫地貝塚遺跡出土個体と、北海道礼文島の船泊遺跡出土の 3 個体についてゲノム DNA 配列を報告しており、縄文人が基層アジア集団の中で早い段階で分岐しその後長く他の東アジア集団からは遺伝的に孤立していたことを示した (Kanzawa-Kiriyama et al., 2017, 2019)。

つまり核 DNA の分析は縄文人は南ルートでアジアに入った集団から早い段階で分岐したことを示

2.3 渡来人のルーツ

国立科学博物館の篠田謙一らは弥生時代人骨の DNA 分析を進めており、結果としていろいろなことが分かってきているようだ（日経サイエンス編集部，2024）。たとえば弥生時代人のある 1 個体についてそのルーツが中国東北部地域と特定されたとのことで、渡来人は複数の地域に由来した可能性が示唆されたという。また、大陸から渡来してきた集団は必ずしも遺伝的に均一ではなく、渡来前から、縄文人と同じ祖先に由来する朝鮮半島の在来集団と、大陸系の集団とがさまざまな割合で混血していたことも分かったという。

2.4 港川人のミトコンドリア DNA

東邦大学の水野文月らのグループは、港川 1 号人骨のゲノム解析に挑戦し、核 DNA は残念ながら得られなかったようであるが、ミトコンドリア DNA の全配列を決定し報告している（Mizuno et al., 2021）。それによると、港川 1 号のミトコンドリア DNA は、アジアの現代人に見られる M と N と呼ばれる大きな 2 つのハプログループのうち、M の祖先段階に相当するものであった。このことは、港川 1 号は、日本列島の各時代の特定の誰かの直接の祖先とは言えないが、日本を含めた現代東アジア人の祖先集団に属していたことを意味するという。

3. 旧石器人骨の新たな展開

3.1 新しい旧石器遺跡

旧石器時代の人骨資料が少ないことは冒頭で説明した通りであるが、沖縄では最近 10 数年の間に複数の新たな旧石器遺跡の調査が進み、人骨化石も発見されている。その一つはサキタリ洞である。サキタリ洞は、沖縄本島南部の雄樋川流域に分布する洞窟の一つであり、雄樋川の下流には港川遺跡がある。サキタリ洞は「ガンガラーの谷」というガイドツアーの出発点となっており、誰でも近くまで行くことができる。サキタリ洞では約 4 万年前以降の各時代の地層が積み重なった状態で確認されており、旧石器時代の層からは人骨のほかに、世界最古の貝製釣り針や、大量の動物遺存体が見つまっている。モクズガニやカワニナ、ウナギなどの動物遺存体は旧石器人の食料の残滓と見られ、サキタリ洞が旧石器人の生活の場であったことが示唆される（沖縄県立博物館・美術館，2022）。人骨の分析は現在進行中である。

3.2 白保竿根田原洞穴遺跡

もう一つの新たな旧石器遺跡が石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡（白保遺跡）である。白保遺跡は石垣新空港建設にともなって 2008 年に発見され、その重要性を鑑みて空港敷地内に現地保存されている。新空港開港前後に実施された複数回の発掘調査により、お

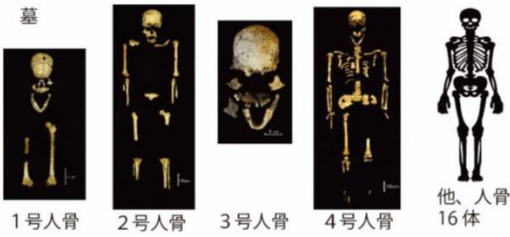
	洞穴利用の変化を示す出土遺物	絶滅種
Layer I 492 ~ 307 cal BP 中世～近世	生活跡  中国磁気 タイ陶器 土器 ウシ 炉跡	
Layer II 1,570 ~ 1,885 cal BP 古代	自然災害  津波堆積層	
Layer III A 1,358 ~ 4,154 cal BP 完新世後半	生活跡  土器 チャート 石英 イノシシ 魚 炉跡	 シロハラネズミ ネコ
Layer S 3,851 ~ 4,829 cal BP 完新世後半	墓  人骨2体 骨製品 貝製品	
Layer III B 10,296 ~ 11,075 cal BP 完新世初頭	 チャート 石英 イノシシ 生活跡 魚	 シロハラネズミ ネコ
Layer B 14,136 ~ 17,966 cal BP ※イノシシ骨の年代のみ採用 更新世末	 イノシシ	 シロハラネズミ
Layer III C～IV 19,290 ~ 27,759 cal BP ※人骨の年代のみ採用 更新世	墓  1号人骨 2号人骨 3号人骨 4号人骨 他、人骨16体	 シロハラネズミ ネコ

図3 白保竿根田原洞穴遺跡の利用の変遷概念図

沖縄県教育委員会（令和5年3月）「国指定史跡 白保竿根田原洞穴遺跡保存活用計画書」より。

が残っており、解剖学的位置関係を保ちつつも崩れた出土状況から、遺体を土に埋めずに安置する風葬によるものと推測される。他の個体も風葬後の集骨の可能性がありことや、道具や食糧残滓などの生活の痕跡が全く出土しないことから、洞穴は全体として風葬の墓地として使用されていたものと考えられる。最近実施した傷跡の分析からもこの風葬の可能性を支持する結果が得られている。我々は白保4号の頭骨形状をデジタル復元し、同時代あるいはのちの時代のアジアの人骨資料と比較分析した（河野ほか、2018）。

その結果、白保4号頭骨の形状は港川1号よりもベトナムの旧石器時代人骨などに似ていることが示唆され、同じ琉球列島の旧石器人骨と言っても少しずつ違いがありそうであることが明らかになった。さらにこの結果を念頭に、白保4号の生前の顔貌を再現

よそ27000年前の旧石器から近世までの複数の層序が確認された（図3）。

特に最下部の旧石器時代の層からは1000点を超す人骨片が見つかり、少なくとも19人分が含まれているものと推定されている（沖縄県立埋蔵文化財センター，2017）。保存のよい頭骨が4個体分あり、このうち3個体については体の骨も特定されている。これらの個体はいずれも男性のものと考えられるが、推定身長は158～165cmと、港川人ほど小さくはなかったようである。中でも4号人骨はほぼ全身の骨



して合わせて報告した（図4）。

現在、白保2号と3号についても復顔作業を進めているところであるが、2号、3号、4号の頭骨はそれぞれに異なった形状をしており、復顔の結果がどのようなになるか楽しみなどころである。

図4 白保4号の復顔結果

4. まとめ

本発表では日本列島人の由来について、人骨資料そのものとそこから抽出した遺伝子情報から、これまでにどのようなことが明らかになってきたかを概観した。明らかになってきたことも多いものの、まだわからないことも残っている。日本列島の旧石器時代は遺跡は多いが人骨資料が少なく、その由来についてはいまだによくわからない。沖縄で新たに発見された遺跡から出土した人骨資料の遺伝子を含めた分析からいずれ新たな知見が得られることが期待される。縄文時代人に関しては遺伝子に関する知見が徐々に増えているが、遺伝子が示すのはいずれかの集団との直接的な関係というよりは、彼らが古いルーツを持つことであった。港川人のミトコンドリア DNA も同様に東ユーラシアの古い祖先段階で分岐したと示唆されたことは、沖縄の旧石器人と縄文人との間に何かしらつながりがあることを示しているのかもしれない。一方、縄文から弥生への移行に関しては遺伝子情報から二重構造説をおおむね支持する結果が得られているが、細かい部分で新しい知見も得られている。縄文や弥生の人骨資料からさらに多くの遺伝情報が得られればより詳しいことがわかるかもしれない。そのためには既存の人骨資料からDNAを回収する工夫に加えて、新たな人骨資料の発見も望まれる。

引用文献

- 馬場悠男 (2020) 幻の明石原人から実在の港川人まで. 学術の動向, 25(2): 34-37.
- Gakuhari et al. (2020) Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations. *Communications Biology*, 3: 437.
- Hanihara (1991) Dual Structure Model for the Population History of the Japanese. *Japan Review*, 2: 1-33.
- HUGO Pan-Asian SNP Consortium (2009) Mapping Human Genetic Diversity in Asia. *Science*, 326: 1541-1545.
- Kanzawa-Kiriyama et al. (2017) A partial nuclear genome of the Jomons who lived 3000 years ago in Fukushima, Japan. *Journal of Human Genetics*, 62: 213-221.
- Kanzawa-Kiriyama et al. (2019) Late Jomon male and female genome sequences from the Funadomari site in Hokkaido, Japan. *Anthropological Science*, 127: 83-108.
- 近藤恵・松浦秀治 (2007) 日本列島の「旧石器時代人骨」—古人骨の年代推定とその信頼性—. *生物の科学 遺伝*, 61: 44-49.
- 河野礼子ほか (2018) 3次元デジタル復元に基づく白保4号頭蓋形態の予備的分析と顔貌の復元. *Anthropological Science (Japanese Series)*, 126: 15-36.
- McColl et al. (2018) The prehistoric peopling of Southeast Asia. *Science*, 361: 88-92.
- Mizuno et al. (2021) Population dynamics in the Japanese Archipelago since the Pleistocene revealed by the complete mitochondrial genome sequences. *Scientific Reports*, 11: 12018.
- 日経サイエンス編集部 (2024) 別冊日経サイエンス 269 ゲノムで解き明かす人類史 縄文・弥生を生きた人々のルーツを探る. 日経サイエンス社.
- 沖縄県立博物館・美術館 (2022) 沖縄県南城市 サキタリ洞遺跡の発掘 (改訂版 2022). 沖縄県立博物館・美術館.
- 沖縄県立埋蔵文化財センター (2017) 白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書 2 —総括報告編—. 沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄.
- 太田博樹 (2023) 古代ゲノムから見たサピエンス史. 吉川弘文館.
- Watanabe and Ohashi (2023) Modern Japanese ancestry-derived variants reveal the formation process of the current Japanese regional gradations. *iScience*, 26: 106130.

小林達雄（こばやし たつお）

國學院大學名誉教授 / 考古学 縄文文化

Keyword：縄文時代研究。第3回濱田青陵賞受賞者 濱田青陵賞選考委員長



〔略歴〕

國學院大學名誉教授。新潟県立歴史博物館名誉館長。

1937年 新潟県長岡市生まれ。

1959年 國學院大學文学部

1961年 國學院大學大学院博士課程満期退学。

東京都教育庁文化課から文化庁文化財調査官に転任。

1978年 國學院大學文学部助教授

1985年 國學院大學文学部教授

1994年 『縄文土器の研究』にて博士号を取得

1998年 新潟県企画調整部参与。

2000年 新潟県環境生活部参与。

2000年 新潟県立歴史博物館館長。

2008年 國學院大學を定年退任 國學院大學名誉教授。

2023年 アメリカ芸術科学アカデミー会員

- ・『縄文土器1』（日本の原始美術 1）講談社 1979
- ・『縄文の技と道具 縄文時代1』（日本のあけぼの 2）毎日新聞社 1989
- ・『縄文のかたちとところ 縄文時代2』（日本のあけぼの 3）毎日新聞社 1989
- ・『縄文土器の研究』（小学館）1994
- ・『縄文人の世界』（朝日選書）1996
- ・『縄文人の文化力』新書館 1999
- ・『ミュージアムの思想 小林達雄対談集』ミュゼ 1999
- ・『縄文人追跡』日本経済新聞社 2000
- ・『縄文の思考』ちくま新書 2008

共編著

- ・『日本陶磁全集3 土偶・埴輪』亀井正道共編 中央公論社 1977
- ・『日本原始美術大系I 縄文土器』講談社 1977
- ・『図説発掘が語る日本史 第2巻 関東・甲信越編』新人物往来社 1986
- ・『古代史復元3 縄文人の道具』講談社 1988
- ・『縄文土器大観』全4巻（編著、小学館）1988-89
- ・『新版古代の日本 第7巻 中部』原秀三郎共編 角川書店 1993
- ・『縄文時代における自然の社会化』編 雄山閣出版（季刊考古学・別冊）1995
- ・『最新縄文学の世界』編著 朝日新聞社 1999
- ・『縄文土器の編年と社会』編 雄山閣出版（普及版・季刊考古学）1999
- ・『世界史のなかの縄文 対論』佐原真 新書館 2001
- ・『縄文ランドスケープ』編著 ジョーモネスクジャパン機構 2002
- ・『古代翡翠文化の謎を探る』編 学生社 2006
- ・『考古学ハンドブック』編 新書館 2007
- ・『土器の考古学』安藤広道・後藤建一・田尾誠敏・手塚直樹共著 学生社 2007
- ・『総覧縄文土器 小林達雄先生古稀記念企画』アム・プロモーション 2008
- ・『世界遺産縄文遺跡』編著 同成社 2010

【青陵への軌跡】

「日本考古学の父」と呼ばれている濱田耕作（青陵）。考古学研究者でありながら、実は絵描きとしての側面を持ち合わせています。旅先での風景や人物などの多様なスケッチを描いています。



写真① 『歴代天皇 御陵図誌』



写真② 『旅の画帖』 富士山



写真③ 『旅の画帖』 客車内



写真④ 『旅の画帖』 大仏

写真①は『歴代天皇 御陵図誌』写真②～④は『旅の画帖』から選びました。どの作品も共通としていえるのは、緻密に描かれており、対象物の特徴をしっかりと観察して表現していることでしょうか。筆で描いたり、鉛筆で濃淡をつけたり、水彩を用いるなど多様な技法を試みています。

写真⑤は濱田の著書である『通論考古学』の遺物の図です。遺物の特徴が誰でもわかるように示す濱田の姿勢を見て取れます。

濱田耕作は少年時代の頃より、こういった「観察をして表現する」といったスケッチを繰り返したことで、後に考古学の研究にて役立てることができたと言えるでしょう。

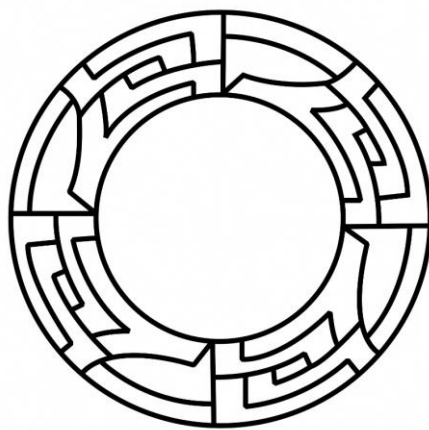
写真が普及しつつある時代の中で、写真では表現できない特徴を自分の目で観察し、捉える研究姿勢は少年時代から培われてきたのかもしれませんが。



写真⑤ 遺物の実測とスケッチ

濱田青陵賞運営協議会事務局 松木研太

写真①～④：岸和田市立図書館所蔵 写真⑤：『通論考古学』より転載



【表紙の図】

直弧文 一ちょっこもん一

濱田耕作の著書『通論考古学』の表紙には、中央に「直弧文」があしらわれる。これは、奈良県北葛城郡広陵町にある新山古墳（しんやまこふん）出土の直弧文鏡の内区にある直弧文を参考に行っていると考えられる。

新山古墳は、馬見古墳群に属し、その群中でも初期に築造され、墳丘は前方部を南にし、全長約 126mを測る。

明治 18（1885）年に土地所有者が植樹の際に穴を掘ったところ後方部にあった竪穴式石室にあたり、銅鏡ほか多数の副葬品が出土した。出土した銅鏡 34 面、その中に 3 面の直弧文鏡がある。

濱田耕作の著書には、こういったワンポイントがあしらわれることが多く、そのほとんどが、古代の遺物ゆかりのデザインであるのも濱田らしい感覚である。